526
35

地獄相當

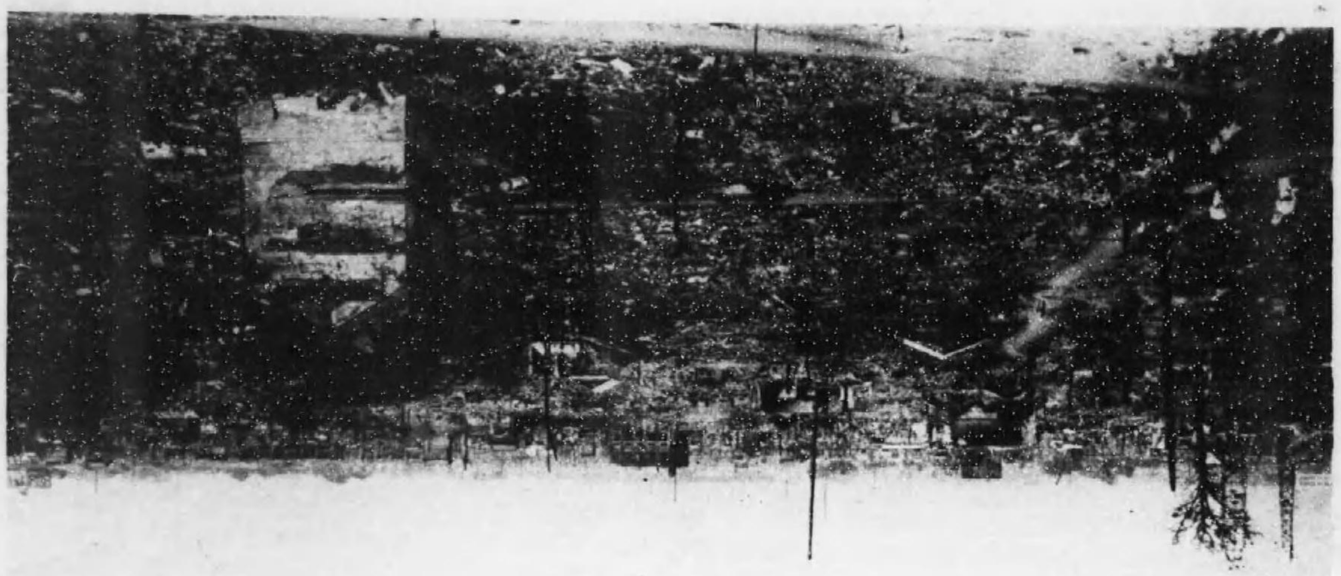
惨憺たる生人きべす憶記

千田是也

526-35

地獄相を直面して

大正
12.12.20
内交



K――君

君ほどのしつかりした人が、むざ〳〵と焼け死ぬなんて、何んといふ過失なのであつたらうか。所謂手足纏ひである智惠さんや靜ちやんたちは、あの震災日の朝早くに、八王寺の實家に歸られたんださうだから、同じ難を避くるにしても、君一人なんだから非常に身輕でなければならぬ筈だ。何故彼の時に今一足足をのばして、延燒して來る憂ひのない場所まで逃げて呉れなかつたのかと、どう考へても遺憾に堪えないのだ。――それは勿論あの三萬餘千人の人たちと同樣に、今更逃ぐるに逃げられなかつたのだらうさ。

が、避難の場所はひとり被服廠跡のみに限つては居なかつたんだ。遠く足をのばして逸早く向島方面にでも逃げてさへ呉れればと、かへらぬ愚痴ではあるが、僕は今も尙ほ君の死を諦めかねて居る。

智惠さんも言つてゐた。同じ死に別れをするにしても、せめては、來世を誓ふ言葉の一つも交はしてから……と。もつともな願ひさ。そして、泣いてばかり居るんだ。

幼ない靜ちやんは、

「お父さんは佛さんになつたのよ。」といふ言葉の下から、

『でも、おつつけ歸つてゐらつしやるんだわ。』

などといつて、一しほに智惠さんを悲しましてゐる。

僕はさうした樣を見るにつけ、避難の場所を撰びそこなつた君の過失を、くれ〳〵も遺憾に思ふのだ。

が、今更なんぼそんな事をいつたつて、要するに甲斐ない愚痴だ。もう止さう。

君はやはり、あゝした慘ましい最後を遂げなければならぬ、拙ない運命を持ちあはせてゐたんだらう。今となつては、靜ちやんの將來が大切だ。僕は、十幾年といふ長い間の、君の友情に酬ゆるもろもろとして、君のただ一人のわすれがたみである靜ちやんに、此の書を捧げる。君もかげながら欣んで吳れ。

大正十二年十月十五日

怒濤生

地獄相に直面して

『記憶すべき人生の大悲慘』

川口怒濤

一

古今にためしなき、地上の一大災害が、今日しも全關東の地に襲ひ來るなどゝ、誰か知り得やう。

大正十二年九月一日の日は靜かに明けて、帝都は常と變りなき整然とした姿のまで、人々は何んの不安もなく、一齊に活動をはじめたのだつた。

此の日、全關東の地は、前日來の風雨漸く收まつて、名殘の陰雲除々に散じ、ともかくも晴天となつた。が、苦熱といつたやうな蒸し暑さに、

『今日も亦暑くなるんかなあ――』

と、誰もが去り難い殘暑を呪ふやうに、噂しあつてゐた。

氣味惡い蒸し暑さ!!。さういふ日は、ひとり東京に限らず、全國的に、四季を通じて時々あるんだ。――尤も、他の土地に比較して、とかく地震の多い東京などでは、地震の前兆かも知れないと思つてゐる人が、ないでもなかつたらうが、まさしくさうど、神ならぬ身の誰か知り得やう。

依然たる平安のうちに、その日も正午近くとなつた。人々は安らかな心をもつて一齊に、空腹を充さんとしつゝあるのだつた。

無智と言はうか、可憐と言はうか、智をもつて萬物に誇る愚かなる人間よ、萬能を誇る科學者よ、おまへたちは大自然がもつてゐるほんたうの力を知つてゐるのであらうか。

見よ、今數分を出ないうちに、全關東の大地を上下左右に搖り動かし、幾十萬の

大厦高樓を一氣に搖り倒して、阿鼻叫喚の一大修羅場を現出せしむるのではないか。

いつかど豫知するか何んぞのやうに、測候所などに嚴めしく備へつけてある、人の智慧を誇り顏のあの地震計!!。そんなものが何にならう。大自然がもたらした暴虐のあとをわづかに記錄して、震幅がどうのなどゝいつてゐるが、我等が災害を免るゝ幾分の助けにでもなるであらうか。要するに大自然にぶつ突かつた人間の力はあまりに弱く且つ儚ないものである。

が、大自然を征伏するなどのおほいなる力はおろか、我等は、何處から來て何處へ行く、それさへも知らないのだ。否、何ものにも換へ難い唯一の寶である我等の此の生命の長短をさへ知り得ないのではないか。

科學の力、宗教の力、そんなものが何にならう。すべては天の心まかせだ。たとへ一秒の後に、天變地異の大騷動が起らうとままよ、我等は常に樂しみの影を追ふて、惜しみなく努力を費してゐるのである。それが即ち我等の住む世相であつて、

その相を文字にあらはせば、寸善尺魔の一語に盡きるであらう。

善き事は甚だ少くして、惡しき事のみ多い寸善尺魔の世ではあるが、さりとて捨て難い樂しみのある世でもあるのだ。

國法嚴として各自の身は安らかに、溫衣飽食も心のままなんだ。其他數へ來れば人としての幸福は十指を屈するも尙ほ盡きないほどである。勿論、身分の上下、資產の有無如何によつて、所謂幸福の程度に甚だしい相違がありはするが、多くの慾心を抱かざるかぎり、決して住み憂い世ではないのだ。

誰か好んでいまだ來らざる災害を、先きに憂ふるものがあらうぞ。

我等に若し天眼通といつたやうな、すべての事を豫知する力があるとしたら、それはむしろ、不幸と云はなければならぬのである。

我等が、人としての義禮を重んじ、最も從順に、國法のそとに一歩も出ないやうに、正しく身を持して、他を冒さず、また他に冒されずして、安らかに生存してゐる、此の幸福は果して何に因るのであらうか。

吉凶ともに豫知しないのが花だ、願ふはただ、惡事災難のなからん事と、命長く幸の多からん事のみであるが、生に伴ふ我等の運不運——所謂運命は、我等の力をもつてしては、如何ともしがたいのである。

知らぬが花!!。全くそうだ。見よ、全關東の地上に住む幾百萬の人は、その日も既に半日のつとめを了へて、何んの不安もなく、晝の食事を執さうとしてゐるではないか。

それは恰度、正午も今一分ほどといふ、午前十一時五十八分四十秒前後の事であつた。

大都會の雜音に一際すぐれた、底力のある、物凄い音響が不意に耳に入ると同時に、ぐらぐ〳〵と大地が搖れて來た。引き續いてまた、しかも上下に、前後左右に……。人々は他をかへりみてゐるいとまもなく、波に搖るゝ小舟の中をでも歩むやう

な、危い足取りでそれでも我れ先きにと、街路へ逃げて出た。

二

一時小歇みになつたと思つたのもほんの束の間で、初震の時よりも更に烈しい動搖が來た。が、斯かる場合にも慾を忘れぬ人々は、或は荷車に、或は風呂敷に、貴重なものを積み込み投げ入れして、持ち出す事を忘れないのだつた。

どの街路も見る〳〵逃げ出した人や、雷光石火の働きをもつて危ふく持ち出した器具類などで、一つぱいになつた。電車も既う動かなくなつて、其所此所にへたばつて了つてゐる。搖れはます〳〵烈しく、早くも人の悲鳴に打ち交つて、ものすさまじく家屋の倒壞する響が聞へて來る。土煙の中を右往左往と逃げまわる人々の、悲鳴ともつかぬ叫喚の聲が其所にも此所にも起る。空は淡墨のやうに暗く、地上は混亂と不安と恐怖のどん底に陷づて、今しがたまで文化を誇り顏であつた大東京は

忽ち一大修羅場と化して了つたのである。

交通機關の完備に、建築の美に、其他すべてに聊かの缺くるところもなく、首都としての誇りを立派に持つてゐた偉大な東京も、大自然の暴虐には流石に打ち勝ち得ないで、今や刻々に、滅亡し行かんとしつゝあるのだ。

大地の動搖は尙ほ歇まず、地上のあらゆるものを倒さなければといつたやうな執拗さをもつて、何んの憐れみもなく大厦高樓を、だん〴〵に崩して行くのだつた。既う恐らく幾萬とも數知れず、家が倒れたであらう。從つて、家と共に押しつぶされた人の數も、定めておびただしい事であらう。

が、災害は尙ほそれのみには止まらないのだつた。やがて其所にも此所にも火の手が揚つて、折柄烈しくなつた風に吹きまくられて火災は見る〳〵ひどくなつて來た。

これが以前の東京であつたら、よしんば一時に數ヶ所に火の手が揚らうとも、消

火機關も充分に備はつてゐるんだから、警鐘一打、直ちに消防自動車の出動となつて、秩正序しく最も敏速に、苦もなく打ち消さるゝのであるが、既に水道も用をなさず、人は此世からなる地獄のどん底に陷つて、自己の生命一つを如何にして助けんかと、ひたもがきにもがいてゐる矢先きなんだ。誰れ一人として消火に努力するものがあらう。

燒くるがまゝ、燃ゆるがまゝの火は、更に他の箇所から揚がる火の手と何時か一つになつて、風のまに〳〵或は西に、或は東に、勢ひすさまじく、見る〳〵手をのばして行くのである。しかも全市のところ〳〵に、さうした集團的な一大紅蓮の焰が、いくつとなく風にあふられて、地上を這ひまわつてゐるのである。

その時も尙ほ地上の搖れは歇まないのだつたが、運强く崩壞を免れた家も、火災の爲めに見る〳〵燒きつくされて、山の手を除く大東京の下町全部は、今や全く火の海と化して了つたのである。

わざはひの神はいつ慘虐の手をゆるめるのであらうか。見よ、地上は今や大混亂の極に陷つて、焦熱地獄をそのまゝの一大悲劇が、隨所に演じ出されてゐるではないか。何を怒り、何を憎んでの大暴虐ぞ。

畏れおほくも、火は飛んで宮城の一部をさへ燒き、本所被服廠跡の廣場では、地震に追はれ火事に追はれして、やつと避難した三萬幾千の人を、一時に燒死せしめたのである。地上のあらゆるものを倒し、更にすべてを燒き盡すのであらうか。

斯くしてその日はともかくも夜に入つた。が、電燈及び瓦斯はすべて滅し、餘震は尙ほ歇まず、火は烈風にあふられて、たゞもう勢ひを猛くするばかりで、今宵を限りに、世も終りかと思はるゝほどの、もの凄さである。

しかも恐るべき流言が盛んになつて、市內の廣場へ、廣場へと逃げ集まつた幾萬の人たちは、危ふく生命を全ふしたにも拘らず、流言に脅されて生き心地もなく火焰の薄あかりのともに、一夜をまんじりともしないのだつた。

消ゆるを知らぬ猛火は、翌る二日になつても尙ほ熾んに、全市のところ〴〵に火煙を揚げてゐるのだつた。

見渡せば、神田、下谷、淺草、京橋、日本橋、本所、深川の各區一帶は、既に焦土と化し、殘る赤阪、芝、牛込、四ッ谷、本郷、小石川、麹町の各區も、或はその半を、或は一部を燒き拂はれてゐるのである。

餘震は今日に至るも尙ほ歇まず、何者のいたづらなのであらうか流言はます〳〵盛んになつて來るばかりで、漸く覺ゆる飢と恐怖に、生存者の氣は刻々に惡化せんとするのだつた。

果然、東京の全市に亘つて戒嚴令が布かれた。同時に、食料品を携帶する者の外は、何人と雖も入京を禁止するといふ布令が出た。

人々は幾分安睹した。それにしても、火は何時消ゆるのであらうか。燒死した人の數は果していかほどであらうか。燒失した家の數も、恐らく十萬二十萬の外に出るであらうが、家を燒かれ、危ふく生き殘つた人の中でも、一家打ち揃ふてともかくも無事であつたなどいふのは極めて稀で、逃げさまよふうちに、或は妻を見失ひ子を見失ひ、親におくれ、夫におくれ、子を燒き殺されなどして、生別死別の悲しみに、呆然としてゐる人もすくなくないのだ。

生き殘つたものが果して幸福か、貧者も富者も今は一切平等といつた有樣で、各所の廣場へ避難した罹災者は、何れも飢え、何れも露天のもとに、身のなりゆきを案じてゐるのだつた。

當時關西地方の新聞は、初號活字に十幾倍する大活字をもつて、東京市街全滅の大慘事!!。

焦土と化せる大東京!!。

死滅せる横濱!!。

などの見出しのもとに、日に幾回となく號外を出して、細大漏さず關東地方の大災害の狀況を、讀者に報じたのだつたが、事實は新聞の記事以上に、慘の慘なるもので、如何なる誇大の筆をもつてするも、到底及ばざるの憾みがあつた。

言語に絶した、文字を超越した一大災害なのである。が、試みに當時の、關西地方の新聞に掲げられた飛行機便其他による災害報告の記事を採錄して見よう。

勿論、東京を中心とした通信交通などの機關は、すべて破壞しつくされて用をなさないのだつたが、逸早く焦土の東京を脱出した新聞記者などが、多くは徒歩で、或は遠く東海道線を沼津に出で、或は中央線の川口町から漸く汽車で長野に出でなどして、はじめて通信の便を得、各地に向つてそれ〳〵急を報じた。と同時にまた一方では、船橋、銚子、其他横濱に碇泊中の汽船から發した無線電信によるものであつたが、眞つ先きに實際の報告をもたらしたのは、飛行機によるものであつた。

所澤を二日午前八時に出發した所澤航空學校の波多野砲兵中尉は、東上等兵を同乘せしめ、途中各務ヶ原にてガソリンを補充して、午後二時十五分大阪城東練兵城に到着した。同中尉は直ちに第四師團司令部に赴き、東京附近大震災の報告をなし、師團長を官舍に訪問、陸軍パン十萬貫、米千五百石を至急巡洋艦に載せ、回送すべき旨の陸軍大臣の命令書を傳達した。

尙ほ同中尉のもたらした、陸軍大臣より第四師團長に宛てた東京方面の狀況報告書は次の通りである。

一、一日午前十二時〇五分地震あり、東京市内倒壞家屋多數、人畜の死傷夥多なるも調査未了なり。

二、震害と同時に市内各所に火災起り、神田區、日本橋區、京橋區、淺草區、下谷區方面特に甚だしく、尙延燒しつゝあり。

三、主要官廳にして既に燒失せるもの、内務省、大藏省、文部省、帝室林野管

理局、衛生材料廠、東京工廠の大部等なり

四、目下在京各部隊を以て、市内の警備に任じつゝある外、國府臺、習志野、松戸及び千葉の各部隊を、逐次東京に招致しつゝあり。

五、陸軍各部隊は前項の如く、市内の警備に任じつゝある外、自動車隊、衛生隊等を以て、一般罹災民に對し糧秣の分配、給水、傷病者の救護に關し、全力を擧げて努力しつゝあり。

又、同中尉は曰く、

二日午前八時半に所澤を出發し、東京の上空は約千米の高度を以て飛行したので狀況はよく分つたが、當時東京市内四五箇所は、尙ほ盛んに燃え熾つてゐるのを見た。更に八王寺市にも若干の火の燃えつゝあるのを見たが、横濱市は今や盛んに燃えつゝあり、黑煙濛々として天を掩ひ、實に凄慘極まる光景を呈してゐた。

横須賀市は家屋の大部分崩壞し、市内には火を認めなかつたが、海岸の遺船所方面に黑煙の立ちのぼつてゐるのが見えた。更に小田原では夥しい家屋の崩壞してゐるのを見たが、箱根以西沼津附近からは列車も運轉し、常態に復してゐるものゝ如く見うけられた云々。

更に右波多野中尉と同乘して來た東上等兵は東京地方の震災の狀態につき左の如く述べた。

一日正午ころと覺しい時分、第一回の搖が來てから次いで二回、三回と連續的に强い激動を感じ、間もなく激しい地震があり、航空學校の煙突やら壁が一堪りもなくくづれかゝり、校内で大騒ぎをやつてゐると、東京方面の空に當つて突然ものすさまじい火焰の上るのを眺めました。それと前後して隊の無電に、神奈川縣知事から、全市倒壞死傷數十萬といふ受信があり、それで横濱と東京市街の震害の甚だしいことを感じたわけです。夜に入つてから東京の空は、炎

々天を焦すが如くに、燃えさかる火の手が見え、軍隊は殆んど出動して饂ケ關を中心に、官城一帶の警戒の任に當る事になつたさうです。

自分は午後八時。兵四十名を引率して麴町區へ出動しました。

東京へ足を入れたのは新宿からで、その時は地上こそ龜裂を生じてゐなかつたが市電は全部軌道外に脫線し、軌道の敷石は互びに盛り上つて喰ひ違つてをり、人々は街路に飛び出して避難し、その間へは兩方から電柱が折れて重なり合ひ、勿論それも電燈の故障から眞暗闇で、實際維新前の暗夜を思はしました。その中に僅かに私達の持つた提燈の光りと蠟燭の明りでこれだけの狀態を見る位のもので、暗中に泣き叫ぶ老幼の聲はそれは悲慘なものでした。

火災は八方に起つて居り、搖り返へしが依然激しく繰返すため、私達でさへも步行に困難を來して、目的地の麴町三丁目までやつと辿り着きました。その頃は十時前後で、淺草の十二階は倒壞し、六區の建物は全部焦土となり、丸の内の内外ビルデングの如きは、數階上から横樣に倒れてゐて、このビルデング内でも二百人の人が死んだとのこと、その殆んどは倒壞し、煉瓦と煉瓦に挾まれて、見るも無慘な狀態でした。

宮城内には僅かに外堀の損傷があつた位でしたが、赤阪から霞ケ關の各官廳官邸は、甚大な損害を受けてゐました。帝室林野局はすでにその時火災を起してゐました。今朝八時所澤を出發する時の情報は、四谷と本郷の一部を殘す他全部は燒失したとかのことで、飛行機上から見た東京市街は尙は盛んに、各所に猛火の荒れ狂ふてゐるのを認めました。横濱市街は殆んど何ものも殘さない荒野原の如く見下されました。出發の時の横濱からの情報には、巴里丸その他大船へ避難したものは辛うじて助かつたが、小舟に避難した他の人々は、折から起つた海嘯の爲めに、呑まれてしまつたとのことでした云々。

（大阪朝日新聞所載）

其他、有線電信、無線電信、及び電話などによるものとして、次のやうな記事が何れも初號（活字）見出しのもとに、數多く掲げられてあつた。

一日正午頃、東京市には突如として大震動起り、スワ地震よと打ち驚き、全市民、色を失して戸外に飛び出したが、此時既に全市に亘る大建築物の多くは、一堪りもなく倒壞し、大爆音と共に各所に火災起り、忽ちにして全市は修羅の巷と化し、阿鼻叫喚の聲天地にみち〳〵て鬼哭愁々、未曾有の大慘狀を呈しつゝあり。（松本來電）

東京は大地震なりしも、攝政宮殿下及び賢所御無事であらせらる。一方田母澤御用邸の兩陛下の御模樣承はりおらず。（船橋無線電信局發、吳鎮守府司令長官着）

天皇、皇后兩陛下には、至極御無事に渡せらる。（東京發大阪平野郷無線電信局一日午後一時十分着）

一日正午の地震による東京市内に於ける被害は實に甚だしく、淺草十二階の大建物が第一に大音響とともに倒壞し、その下になつた數十戸の家屋は、全部滅茶々々に倒壞し、死傷者も多數で慘目狀も當てられず、その結果遂に火災を起し、午後零時半頃早くも四五箇所に火を發し、午後九時頃には猛烈なる南風に吹き捲くられ、猛火炎々として燃え擴がり、午後十時頃群馬縣高崎市から眞紅の如く彩られた焰の空が眺められた。（高崎來電）

横濱市では一日午後零時頃、最初は水平動の地震が卅秒つゞき、それから上

下動に變つたと思ふ間もなく、全市の住宅は大半滅茶々々に壞されてしまつた。身を以て免れたものはまだしも幸である。屋根の下に押へられ、壁の下に挾まれて出るに出られず、援けを呼ぶ悲鳴が彼方にも此方にも耳をつんざく。避難民の多くは横濱公園にも櫻木町驛前にも打集まる中には海岸に飛出して、船で沖へ逃げ出した者もあるが、川の中の舟に避難した者は、後で舟が燒けたので死傷者を多く出した。

櫻木町の廣場から見渡すと、宛も晝食時で火を使用してゐた事とて、各戸から數十條の黑煙が立昇り、間もなく西方の烈風にあふられて、紅蓮の舌は崩れた市街の上を流るゝ樣に這ひ廻る。先づ横横貿易新報社の後から起つた火の手は、元町小學校に移り、貿易社をもなめ盡す頃には、北から燃えて來た猛火は櫻木町驛及び電話局を燒き、眞金町や住吉町からも燃え立ち、その他にも十數箇所から黑煙を漲らせるので、横濱市は忽ち黑煙に包まれて了つた。正金銀行、縣廳、市役所等は地震には壞れなかつたが、猛火の爲に燒き盡された。かくて午後七時頃には市役所、正金銀行、グランドホテル、横濱船渠會社、櫻木町驛をはじめ、屈指の建物悉く烏有に歸し、全市火の海となり横濱市は全滅に歸した。

殊に、山下町外人居留地の被害特に甚だしいやうである。公園及櫻木町驛前における避難の群集は、一時は四方を猛火に包まれ、焦熱地獄の有樣となり、中には悶死するものもあり、櫻木町驛前にも死體が七つばかりころがつてゐたが、誰も收容する遑がない。そのうちに飢と渴とが迫つて來たが、一滴の水もないので黑いドブ水をガブ〳〵やつたり、燒けただれた梨の落ちてゐるのを奪ひ合つて食ふ樣、眞に悲慘の極である。しかし全市が燒け亡びたのだから、市役所でも警察でも手のつけやうがないので、避難民はただ死を待つばかりの狀態で夜を徹した。この日の死傷實に十數萬、うち死者數萬に達する見込なり。

（横濱碇泊船某船發銘ナ無線電信所經由潮岬無線電信局着串木電話）

東海道線は沼津以東全然不通、裾野以東の情報に接せず、江尻より海路東上するの外なし。（靜岡發、名古屋着電）

この日朝から風強く、曇天で蒸暑かつたが、正午十二時前伊豆大島の東、東京を距る二十六里の海底を中心とする激震のため東京、神奈川、千葉の市街は實に、安政の大地震に何層倍する大慘害を被つた。わけても横濱、横須賀方面最も強く、横濱の如きは殆んど全滅の噂なるも、交通々信機關全く絶えて、詳細を知るに由なし。

東京市内は山の手方面よりも、本所、深川、下谷、淺草方面の下町が最も被害多く、家屋は一軒として滿足のものなく、或は大破損し、或は倒壞し、市民はすべて戸外にあり、道路の中央とすべての空地は、避難民をもつて滿され、通行し難し。激震十數回にて小歇みとなりしも、一時間毎位に激震は引き續き夜に入つて歇み、震災に續いて火災が十數ケ所に起り、折柄の烈風に煽られ、四方に延燒し、水道全く斷絶して消防の方法なく、全く火の海の擴がり行くに任せるのみ。すべてに燒失せるもの、高輪御殿、學習院一部、帝室林野局、帝國大學内一棟、内務省、税務監督局、警視廳、商科大學、共立女子職業學校、帝國劇場、有樂座、砲兵工廠、目黑火藥庫、士官學校、藥學專問學校、日本電氣、京橋區内の各新聞社、淺草十二階、その他銀行會社、商店民家、無慮二十萬が既に灰燼に歸した。殊に神田方面と、丸の内より銀座にかけての方面と、日本橋淺草方面、最も火災の區域が廣く、夜の九時に燒け出された人々の荷物絡繹として後に續く慘狀目もあてられず。

燒けた新聞社は、東京朝日、中央、時事、國民、讀賣、アドヴァタイザー等である。

砲兵工廠の爆發は頗る凄じいものであつた。東京驛は無事だか、第三、第四のプラットホームは陷落した。

東京の主なる火の手は、神田神保町、駿河臺より飯田町、小川町、須田町、日比谷公園附近から警視廳、帝劇より有樂座、銀座一帶、日本橋本石町より須田町へ全部（但し重に西側）淺草本所深川一圓、飯田橋から大曲りまで、新宿御苑前通り一帶、赤阪田町方面一圓である。

東京府は陸軍と共力し、各所に救護班を設け、死傷者を收容しつゝあり。近衛師團の營庭の如き死傷者をもつて充され、軍醫總出にて應急手當をしてゐる。倒壞家屋中最も悲慘なるものは印刷局にして、數百人の職工逃げおくれてその下敷となつたやうだ。建築中の丸の內內外ビルデングも倒壞、二百數十人の人夫が即死したらしい、日本電氣工場では六百人の職工が死んだといはれてゐる。

（二日午前十時長野發、大阪每日新聞着電）

火災は今尙（二日午前九時）猛烈にして既に千住より品川に及び、爆發相躍ぎ、紅蓮の焰は船橋からも見ゆ、震動今尙歇まず連續し、戰々兢々たり。

（二日午前九時船橋海軍無線電信局發、神戸港某船着）

二日午前東京全市に戒嚴令布かれ、何人と雖も一步も東京に入らしめず、食糧品携帶者のみ入京せしめつゝあり。（長野來電）

一日正午大地震に引續き、大火災起り、全市殆んど火の海と化し、死傷何萬あるやも知れず、交通通信機關全部不通、飲料水、食糧なし、至急急援を乞ふ。

（一日午後九時一分神奈川縣警察部長發、銚子無線電信、コレア丸經由、大阪朝日新聞社着電）

伊豆の伊東下田間に大海嘯襲來し、家屋五六百流失せり。（濱松電話）

沼津以東の被害甚だしく、殊に箱根溫泉及び小田原は、殆んど全滅の有樣である。（靜岡電話）

駿河灣及び東京灣入口に於ける各燈臺は悉く破壞せられ、唯東京灣入口柱燈の立標が一つだけ辛くも點火し得るのみにて航海上非常の不安を感ず。（神戸着電）

當地地震のため、海軍病院全燒、鎭守府、市街等大半燒失、死傷者多く悲慘の狀況にあり、醫療機械醫藥及び食糧、出來るだけ多量、艦船便にて送附を得れば幸なり、可然。（横須賀鎭守府司令長官發、吳鎭守府司令長官宛、吳來電）

貴電多謝、横濱全市殆んど全滅に近し、水道破壞、罹災者九十萬、水、食糧なく饑餓に瀕しつゝあり、最良の御救援を待つ。（神奈川縣知事發、大阪府知事宛返電）

以上は多く、關西地方に於ける九月三日の新聞及び、二日の號外三日の號外などに記載されたものである。

五

此度の震災は、單に東京、横濱の二大都市を、殆んど全滅に陷らしめたばかりでなく、神奈川縣特に甚だしく、次いで總房半島方面、九十九里濱方面、埼玉、山梨のあらゆる市町村は、おしなべて害を被つたのだつた。しかも、十萬餘の人命を奪ひ、同數以上の傷者を出し、東京市内のみにても四十幾萬餘の家を燒き、五十餘億の財を空しくせしめたのである。

實に有史以來の大慘事で、爲めに日本全國はおろか、世界各國は擧げて救援の誠を、我が罹災者にそゝぐに吝でないのだつた。

が、勿論一日二日の短時日をもつて、報道を了つて了ふほどの小さな災害ではないのだ。否、最初の道報はむしろ誤りがちで、且つ斷片的で、まだほんのその一部分といつたやうなたよりないものであつたが、四日以後の分は比較的正確で、且つ

算數的に、報は一報と飛電の至るごとに災害の甚だしい、凄慘極まりなき狀況を、各新聞は惜しみなく紙面の全部を擧げて、幾日も災害の記事を滿載してゐるのであつた。

重なるものを更に採錄して見よう。

日光に供奉中の牧野宮内大臣は、二日夕刻自動車を飛ばして急遽歸京し、首相山本權兵衛伯と長時間に亘り、罹災者救助に關し凝議を遂げ、積極的善後策を講ずることになつた。（長野來電）

攝政宮殿下には、一日夜は御一睡もなく宮内省よりの報告を、德川侍從次長より御聞き取りあり、一方ならず御軫念遊ばされたが、殿下の御思召に依り、目下救助につき協議中である。（名古屋電話）

天皇陛下には今回の災害の狀況を聞召され、御救恤の御召しをもつて、御内帑金中より、金壹千萬圓を御下賜遊ばされたので、三日午後六時、山本内閣總理大臣は、赤阪離宮に參内して拜受した。（長野經由東京電話）

政府は震災救濟會を組織して、救濟金九百萬圓を支出することに決した。（名古屋電話）

政府は罹災者救援のため、三日非常徽發令を發布した。（佐世保着無線電信）

慘害を極めてゐる横濱では、全滅の跡にも熾んに流言蜚語行はれ、人心の不安は極度に達してゐるので、三日遂に同市にも戒嚴令が布かれた。（靜岡電報）

東京全市に布かれてゐる戒嚴令も、公務を有するもの、多量の食糧を携帶せるもの、東京市に家族を有するもの等の事情を有する者に限り、特に入京を許可さるる模樣である。（三日正午名古屋鐵道管理局發、大阪運輸事務所宛）

東京は三日朝來微震は今猶止まないが、火災は本日午前八時漸く鎭火、餘燼猶甚だし。（遞信省三日午後八時二十五分發、各遞信局長及び各府縣知事宛）

鎌倉に御滯在中の山階宮武彦王妃佐紀子女王殿下（御年廿）は、震災當時御避難の遑なく、遂に薨去遊ばされ、又鵠沼の吉村別莊に御滯在中の東久邇宮稔彦王第二王子師正王殿下（御年七つ）も御同樣薨去遊ばされ、小田原の御別邸に御滯在中の閑院宮、同妃殿下には御無事であらせられたが、寛子女王殿下（御年十八）には、御同樣遂に薨死遊ばされた。（名古屋經由特）

小田原は震害に加ふるに火災起り、四千五百戸燒失せり。同地方一帶の死者四千七百、傷者數萬に及ぶが如し。

眞鶴、熱海、伊東各地の震害亦甚だしく熱海には一萬の人民餓死に瀕すと傳ふ。靜岡縣當局及び三島重砲隊、靜岡步兵聯隊の一部は、極力救濟に盡力中。（關東戒嚴司令部五日發表）

葉山御用邸は半壞れとなつた。（高崎經由電話）

農商務省の推定に依れば、今次の災害に依り燒失家屋火災被保險金額は約二十二億圓以上に上るので、現在保險會社の資力三億圓を以てしては、保險金支拂の能力はない。隨つて不可抗力の法律に從ひ支拂を拒絶するであらうが、見舞金の形式で多少の支拂をなす意響あらば、當局としても低利資金の融通その他の方法で出來得るだけの援助は惜しまぬつもりである。（東京電話）

戒嚴令施行區域は四日、東京府及び神奈川縣全體に擴大された。（長野電話）

横濱地方裁判所末永所長及び同檢事局福釜檢事以下四十餘名の判檢事は、執務中廳舍倒壞、爲めに全部壓死したので、司法省では目下これが善後策につき講究中であると。（名古屋電話）

神奈川縣知事報告。神奈川縣大震災の五日までの情況左の如し。

一、小田原方面全町の三分の二以上燒失、死傷算なし。

一、大磯方面家屋二分の一倒壞、死傷現在判明せるもの三百名以上、相模紡績女工約百名壓死。

一、藤澤方面家屋八分通り倒壞、管内の死者二千八百四十五、鵠沼の御避暑中の東久邇宮師正王殿下薨去、同師博王殿下御負傷。

一、鎌倉地方、鎌倉町は殆んど倒壞、六分燒失、小海嘯、死傷千名以上。

一、三浦郡方面、浦賀港は全滅、管内死者三百、負傷三千。

一、三崎方面死者約七千。

一、横須賀市平地一面倒壞、火の海と化し、海軍工廠、鎮守府等▲失、死傷者甚だしき模樣なり。（名古屋電報）

五日夕刻迄に檢視を終り、收容したる屍體左の如し。

本所被服廠跡、三萬二千五百六十四名、吉原遊廓、二千五百名。

西神田、一千名。（警視廳發表）

尙ほ右は算へらるゝ程度の屍體であつて手足其他骨が四散して、算へられないのはふくまないのであるから、今後の分を合すれば、恐らく十萬に近からうと豫想されてゐる。（東京電話）

今回の東京の災害は嘘のやうな事實だ。二百萬市民の大帝都が一朝にして燒野と化するなど、自然の脅威も偉大である。これまでのやうな立派な帝都を、元通り建設するまでには、今後二十年三十年の歳月はかゝる。損害五十億と見積るとも多くはないとの噂が高い。今後東京市といふものを如何にして恢復するか、失業者はあつても職業がない、夥しい避難民を如何にさばくか、學校も會社も行政廳も休止の外はない、現在の罹災民は物の執着よりも、生の問題である。如何にして生計を立てんかと途方に暮れてゐる。

（三日長野發電、大阪朝日新聞社著）

政府は今七日をもつて、三大緊急勅令を發布した。

一、暴利の取締に關する件。

二、支拂延期に關する件。

三、流言浮說の取締に關する件。

以上の三勅令で、その第一は、一般の非災害地に於ける奸商の物價釣上げを防止するもの、第二は、九月一日より三十日迄の間に於て支拂を爲すべき私法上の金錢債務にして、債務者が震災地及び震災の影響により、經濟上不安を生ずる虞れある地區に營業所を有する者については、三十日間支拂を猶豫する所謂支拂猶豫の勅令で、第三は、人心をして不安に陷らしむる流言蜚語を取締るものである。（東京電話）

以上は單に、重なるものゝ一部分に過ぎないのである。

囚人の解放、名士の壓死、集團的の燒死、貨客列車の遭難、軍艦に依る避難者の輸送、飛行機の大活動等、まだ〳〵採錄すべきものは甚だ多いのだが、筆を改めて災害地の狀況を記すとしよう。

帝都の大部分は文字通り、焦土と化したのである。

是れより先き、或は知己先きを目的に、或は的も無う、飢えを充さんがために、不安の域を脱せんがために、東京を逃げ出して行く避難者は、幾十萬とも數へられないほどで、當時東京に近い赤羽、川口町間の七哩に亘る不通箇所を除いてともかくも東京へ通じてゐた鐵道線は、信越線のみであつたが、その信越線への乗場である日暮里停車場は、乗り後れた人、新らしくつめかけて來る人たちで、幾日もく人で埋まつてゐた。

人間の鈴生り汽車！、それも當時の、悲慘なる滑稽ともいふべき一つのエピソードで、各客車の屋根に、寸分の隙も見せず人々の座り込んでゐるのはまだしもで、機關車へまで鈴生りとなつて、爲めに途中で或は振り落され、或は辷り落ちて、折

角震火災の難を免れながら、敢へなく生命を失ふ人が、一列車毎に幾人かづゝあるのだつた。

あたま御注意！

各停車場の陸橋には、さうしたために貼り紙が、上り下り共に貼りつけてあるのだつた。

そのほか、仲仙道、東海道、奥州街道などへ、徒歩で逃げ出して行く人も、夥しかつたのである。

壽永の昔、平家の一門がいよ〳〵西海に落つべく、都の所々に火を放つて、

ふるさとを燒野の原とかへりみて
末も煙の波路をぞゆく。

と、泣きつゝ都を落ちて行つた、當時の落武者より以上の、氣の毒な心の持主がそれら避難者の中に如何に多かつた事であらうか。

各地で避難者の收容を競ひ、募集金品の驚くべき數量に上つたのも、決して不思議ではないのだ、災害に相當する同情なのである。

それほどに此度の災害はひどかつたのである。

『もう東京もだめだ！。』

難を避けて都を落ちて行く人にも、踏みとどまつてゐる人にも、大東京の復活を疑ふ心は充分にあつた。否、あまりに擴大な、あまりに甚だしい大災害のあとを見ては、疑ふはおろか、如何なる力をもつてしても、もとの東京になるなどゝは、どうしても思はれないのだつた。

『なあに、何んといつても東京だ、五年十年の後には、もとの東京より以上に立派な大東京が生れて出るさ。』

しかしそれは空想である。やせ我慢といふものである。否、實地を見ない人の言ふ言葉である。

足を一歩東京に入れ、荒原十里といつたやうな、一大焦土の有様を、もし實際に見たなら、誰だつて、復活を疑ふよりも先づ、果して何時の日に此の燒け跡の結末がつくであらうかと、呆然たらざるを得ないだらう。

大東京の復活！。それは全く、夢を語るに似た愚かな考へである。

『人も澤山に死んだのだ。生き殘つた人もみんな四散して了つたらう。いやさ見限るのが當然だ。百年後は知らず、十年二十年の短日月をもつて、何んとしてもとのやうな、あの般盛な立派な大都會となり得やうぞ。もう駄目だ。斷じて駄目！。』

そうした感じを誰れにも與へるのだつた。

焦土の東京！。

上野の公園から淺草方面を見渡した時、殊更にそうした感じを深ふするのだ。否災害後の東京に對する最もふさはしい形容詞なのだ。

ともかくも、まだ其所此所に立ちのぼる、餘燼の煙の中を、彼方此方とさまよう

て見よう。

本郷區に於ける災害の大なるものは、帝國大學の圖書館の燒失をはじめとし、文科、法科、生理學、醫科學、藥學、數學の各教室及び、山上御殿などの罹災であらう。

小石川區の被害は比較的僅少ではあるが、それでも燒失家屋八百四戸、倒壞家屋百四戸、死者六十名、負傷者約二千、其他輕微な程度に破損された家屋は無數で、町としては信濃町と須川町の二つが燒けてゐる。右の中で、最も大きな被害は、東京砲兵工廠で、工場の大半を燒いて了ひ、殘存した部分も、地震ですつかり破損してゐる。直ぐ隣の、陸軍工學校も起ち難い痛手を負ふてゐる。次ぎが博文館の印刷工場で、地震當時に作業中であつた職工百名は、工場の倒壞と共に全部その下敷となり、ことごとく死傷した。

神田區は、十數年前の大火の時より、更に甚だしい損害を被つてゐる。最初一つ

橋と三崎町から同時に火を發し、續いて隣接の日本橋、下谷方面からの猛火の襲來に、僅かに神田川河畔の和泉町の一角、百戸あまりが燒け殘つたきりで、他は一眸これ焦土といつた有樣である。萬世橋驛は赤煉瓦と鐵骨をのみ殘し、ポッネンと殘る廣瀨中佐の銅像が、焦土の地理を敎ふる唯一の目標である。彼の有名なニコライ堂も、あはれな殘骸となつてゐる。此の區に於ける災害の最も甚だしかつたのは、神保町と小川町で、神保町の電車の交叉點では、地震の爲めに壓死した人の死骸を電車の線路に並べたままで、後の火災に燒いて了つたのである。神田橋、一つ橋は共に燒け落ち、商科大學、如水館、女子職業學校なども何れも燒失倒壞の運命を免れなかつた。

芝區は、芝口一丁目から金杉四丁目に亘る芝區の下町方面全部を燒滅さし、三日の夕刻に漸く鎭火した。燒失家屋約二萬五千、罹災者十二三萬、死者約二百五十人傷者約二千人、芝區役所、愛宕署、消防署、巡査教習所共に燒失、芝公園、增上寺

本堂及び境内には、十萬に近い罹災民が避難してゐた。

京橋區の被害は殊に甚だしく、山城町の發火を最初として、折柄の強風に忽ち大火となり、中央新聞社、ジャパンアドヴアタイザー社、電報通信社、銀座電話局などを一なめにして、一大紅蓮の焰は潮の押しよせるやうな勢ひをもつて、數寄屋橋瀧山町、日吉町方面へと進んだ。斯くして町一町を燒く毎に火は勢ひを加へ、更に他の方面からも火を發し、宗十郎町の藝妓屋街、さては東京隨一の銀座街、其他、國民新聞社、東京朝日新聞社、時事新報社、實業之日本社、次いでは采女町の農商務省、木挽町の遞信省、さては精養軒、大劇場等、あらゆるものを舐め盡し、此間赤羽工兵隊の防火隊は、水に代ゆるにダイナマイトをもつてして、未燒の家屋を破壞し、防火區域を到るところに作つたが、少しも功を奏せず、遂に芝口から芝浦埋立地に及び、一日夜十一時十五分、大瓦斯タンクにまで火がうつつた。死傷者無數五日になつてもまだ、黑焦げとなつた人の死骸がそのままにしてあつたり、築地河

岸には逃場を失つたらしい人の死骸が、いくつも浮流してゐた。

日本橋區の燒け跡は、一眸只僅かに日本橋通りを知るだけで、他は何處が何處やら滅茶苦茶である。危ふく震災を免れた日本橋のあの大建築も、やがて火災に滅びて了つた。白木屋は影も形もなく、丸善も燒け潰れ、僅かに星製藥と第一相互の兩館が、相對して外形を止めてゐるだけである。魚河岸、青物市場方面は慘の慘たるもので、河岸から江戸橋に至る川筋には、子供を脊にした女や男をとりまぜて、四十ばかりの死體が浮いてゐる。見渡す河岸は燒かれた船で一ぱいである。三越も哀れな殘骸を見せてゐた。此の區内に於ける唯一の燒け殘りである日本銀行は、僅かに三階を燒いただけで、着劒の軍人に護られつゝ三日から營業を開始してゐた。

淺草區は、川岸に沿ふた古河汽船會社、有馬伯別邸、今井別邸其他百戸餘、及び觀音堂、仁王門、大增などを僅かに殘して、他は殆んど焦土と化してゐる。燒死した人の死體はまだそのまゝに、路上に横はつてゐた。避難民は觀音堂境内に、或は

淺草公園に、一時難をのがれたが、公園の方は忽ち火炎につゝまれ、四方八方に離散し、上野方面へ逃げる人も幾萬人かあつた。吉原から遠く三河島方面へ逃げ出す人も幾萬人かあつた。新場橋方面に雪崩れ込んで、危ふく生命を助かつた人でも約一萬であつたといふ噂である。淺草公園の池に浮んでゐる死體も、少數ではなかつた。吉原方面は全部燒滅、同公園の池に飛び込みそのまゝ溺死した娼妓の數だけでも、千數百の多きにのぼつてゐる。吾妻橋、廐橋の兩橋は、假橋本橋共に破壞された。

本所區は、死傷者を多く出した點に於て、恐らく全災地害の第一位ともいふべき被害であらう。全區忽ち火の海と化し、追はれ〳〵て唯一の廣場である龜澤町の、被服廠跡に難を逃れた人の數は夥しいものであつた。が、其所もやがて火に包まれて、無慙な最後を遂げた人々の死體で、五町に亘る大廣場をすつかり埋めたのだつた。九月五日、本所相生警察署の調査によると、同所のみで檢視した死體の數は三萬二千五百六十四名であつた。

深川區もやはり、全區が焦土と化して了つたのである。死傷者、行方不明となつた人は恐らく十萬以上であらう。別けても新大橋、洲崎廓内は、激震と大火と加ふるに激浪の襲來で、全く逃げ場を失ひ、住民の殆んどが行方不明となつた。

全く古今未曾有の大災害なのである。

七

東京は一夜のうちに、草より出でゝ草に月の入るてふ、三百年前の武藏野にもなつたやうだ。

夜は電燈もなく瓦斯もなく、交通通信の機關も全部破壞しつくされ、新聞もとより見られないのだ。要するに文明の花も、開化の實も一時に梢を辭して了つたやうな有樣なのである。

大新聞のみでも十幾つかあつた、そのうちの二三は危ふく難を免れはしたが、ケースはでんぐりがへり、輪轉機の運轉を司る電力はなく、憐れにも手刷りの號外を出しなどして、やつと生命をつないでゐるのであるが、非常の際でもありするんだから、よしんばそれらの二三社から、完全な新聞が發行されやうとも、尙ほしばらくはおち〳〵と、それを讀み耽るなどのゆとりは、心の何處を探してもないのだが、災害の地を除く他の地方では、一刻を爭ふやうに、その詳報を知りたがり見たがりしてゐるのである。新聞社としては、より速かに、より詳しく、報道を急がなければ、讀者を他に奪はるるの憂もありするので、地方の各新聞社は、先きを爭ふて東京へと記者を特派したのだつた。

關西の或る大新聞に掲げられた所謂特派員の視察記中には、燒けもせねば壞れもせぬ、東京でも代表的の大建築物である丸の内ビルデングや、東京驛や、淺草の觀音堂までが、燒けた。壞れたとして數へられてあつたが、しかもそれをまことしやかに、『阿鼻叫喚の帝都を縱横に馳驅して廻つた』などゝ、天晴れ一番乘りを氣取つてゐるやうだつたが、見て來たやうな嘘の通信をして、本人自身は高齡あたりでも晝寢をしてゐたのではなからうか。讀者こそいゝ迷惑で、

『淺草の觀音さんも燒けて了つたそうな。』

と、他の、新聞を見ない人に話して聞かした嘘の罪は、誰にあるだらうか。

それらの嘘半分の視察記をよそに、私の畏敬する名古屋新聞の主筆小林橘川氏は次のやうな、しつとりと落ちついた、しかも他と異つた雄大な報告を、その紙上にもたらしたのだつた。

それは、九月十日から四日に亘つて同新聞の論說欄に掲げられた『廢墟の東京から』と題する長文のもので、他の者の視察記よりもはるかに〳〵すぐれたものであるのは言ふまでもない事である。

同氏に乞ふて、そのまま記す事とした。

一晝夜、横濱港の沖合に繫留されたまゝ、私のアラスカ丸は、どうしても上陸を許してくれなかつた、四日の午前十一時になつて、辛つと、麥と玄米との半々の握り飯を二個貰つて、それを食糧として神奈川の岩壁に上陸した、横濱の地理に不案内な私は、その街の全滅の詳細を、新聞記事的に報道するの能力を有つてゐない、それよりも私の氣がかりは東京にある、八里の道を東京へ急がねばならない、上陸して、先づ驚いたことは、横濱のドックヤードの廣場に幾筋かの幅の廣い龜裂が、蛇のはふようにのたうち廻つてゐることである、そして壞れ落ちた入江の橋詰には、ふんどし一つの漁夫らしい一團が、白刃を拔きつれて、正服の歩哨と共に、上陸者を誰何してゐることである、そのものものしい警戒が、白日の下には、不安といふよりも、むしろ輕い滑稽をすら感せしめた。

崩れ落ちた屋根をふむで、東海道の國道をきれて、私は鐵道線路に出た、國道はかはいた砂塵を浴びて、往來する避難者の群が、あまりに多いのを恐れて鐵道線路を東に急ぐことにした、京濱電車を避難家屋にして、家具やふとんを持ち込むで、不安な夢を結むでゐるのもある、鐵道線路に、小屋かけを急造して、疊を敷いて、食事をとつてゐるのもある、緣日の露店のような、そうした小屋に、ふるへる魂を安めてゐる人々の姿がいぢらしい、地震の跡といつたような、荒廢したるやるせなさが、混亂と破壞との底に漂うてゐながらそれから遁れ出ようとする建設と充實との忙ただしさが、活々しく動いてゐる、顧みれば、灰燼に歸した横濱市の空には、スタンダード石油倉庫が、朝からまた新しく一抹の黑煙をあげ始めた、殘るところなくやき滅ぼさねば止まないといふ執拗ねき火勢を見ても、私はもう恐ろしいといふ氣が起らない、一晝夜、船の中から燃えさかりつゝある焰を見つゞけた私は、恐ろしといふ感情を去勢され

てゐるのである。

鶴見の花月園のほとりでは、水の接待がある、附近には饅頭を蒸籠からあげてゐる店もある、氷屋に氷をのむでゐる客もある、サイダーもビールもある、握り飯を頬張りながら、私はサイダーを飲みその空瓶に水を詰めて貰つて、また歩き出す、六郷川の橋鐵では、白砂糖の樽をもち出して、砂糖水を振まつてくれる、蒲田をすぎて大森まで來ると、いまこれから開通するといふ汽車がまつてゐる無理矢理に、それに割りこむで、午後二時半品川驛へ着く、ちようどよいところで、足びろひをしたのである。

鶴見から品川にいたる沿道は、地震のために倒壞した建物も可なりあつたがそれは煉瓦や、コンクリートの西洋建築に多く、一般民家の被害はすくないように思はれた、地震には、高層な西洋建築は危險であるといふような感じがした。

回

品川驛の構外、構内は幾千の避難者で、足のふみ場もない、驛外は混亂と雜沓そのものであつた、私は吸ひつけられるように電柱に張られた號外に眼を光らせた、一杯の人だかりてはあるが、そこには不安も心配もない、案外、人心の落ち着いてゐるのがうれしかつた、線路に立往生をした電車の箱を臨時救護所にあてて、中には藥品を据ゑつけて、醫員や、看護婦がぼんやりとシートに腰かけてゐた、荷物を負うて行くもの、荷車を曳くもの、自轉車で走るものをかこむで、すき間もなく避難者は西へ、西へと流れてゆく、若い娘さん達が、あかい蹴出しを裾短に端折り、姉樣冠りに手拭を冠つてよごれた白足袋に紐をつけて、草履穿きの姿で、杖をたよりに、落ちのびて行くのが、繪のようである、こんな情景を見てゐると、汽車も電車もない江戸時代の昔に還つたのではないかと思はれる、廣重の東海道五十三次の繪卷を見てゐるような夢心地にも

なる、哀れな中に、豊かな情景がのんびりと浮いてゐる。

品川から芝の田町までの間は、完全に人家はのこつてゐる、その間に煙草屋の店が一軒、美しい娘が二人、客を待つてゐるが、誰も買ふものがない、氷屋が二軒、それには客が一杯であつた、八百屋の店は可なり忙しさうであつた、その他はたいてい休業してゐる『放火御注意』といふはり札がところどころにある、それが一日夜以來の市民の不安と昂奮とを、よくもの語つてゐる、森永製菓會社の前では何百人の人々が一列になつて、何かを貰つてゐる、見ると、牛乳を一合づゝ罹災者に給與するといふのである、私も牛乳ときいて、その列に入りたかつたが、今の私の飲むべきものではないと考へて、殘りおしく行きすぎた、考へてみると、私はけふでもう三日間一本の煙草ものまない、船でもらつた玄米の握りめしだけが、乏しい胃の腑に供給されてゐるだけである。けれども、それは決して、私に不幸ではなかつた、むしろそれを滿足に思つた、

氣の毒な罹災者の人々のうへを思ふと、それだけで十分であつた。

回

芝の金杉町から東へ入ると、光景は俄然として一變してゐる、見渡すかぎり荒涼たる燒野ヶ原である、地上に立體的に立つてゐるものとては、ほとんど見當らない、すべては虚無に歸つて、つゝましやかに地上にひれふしてゐる、それは一望たゞ赤石の磊としてうち續いてゐる野原である、フト氣がつくと、愛宕山上に聳ねてゐる筈の、あの六角形の赤い塔が見えない、みどりのある樹立が冬枯の野にかはつてしまつて、印象的な古塔のなくなつたのが殘念である、それでも芝の增上寺と、赤い山門とが、焦げ乾いた松林の中にとり殘されてゐるのは不思議にも喜ばしい。

新橋停車場が赤煉瓦の殘骸をとどめて内部は、すつかり燒け落ちて空虚となつてゐるのだ、たゞつぴろい燒野ヶ原の、展望を遮る、唯ひとつの大きな建物

であつた、其の昔衣川に立ちはだかつたまゝで燒け死んだといふ武藏坊辨慶の姿が、てうどそれではないかといふような聯想が起るのである。

新橋を渡つて、狹くなつた宗十郎町をたづねて、支局の燒跡を尋ねた、もしや、まだ殘つてゐないかといふ一縷の望みも、新橋を渡る頃には全く放擲せざるを得なかつた、明治の五十年間、日本の文化を代表した美しい銀座通りは、見る影もない荒寥の底に崩れてゐた、本社の東京支局はその銀座通りの裏側にあるのであるが、そこにはたゞ用をなさぬ金庫が一つ、燒跡にのこつてゐるだけであつたいつも見なれた紅木屋の赤いしやれた看板もなく、よく遊びに行つた時事新報も燒けてゐた、國民新聞の跡には、輪轉機が三四臺赤くよごれて、もう威勢のよい運轉の音を聞くことも出來ない、このあたりは骨格だけを殘して、廢墟のボムペイを思はせるような荒寥が漂つてゐる、やけあとに立てられた木札によりて支局員みな無事、立退先はステーション、ホテルといふことを

知りて、先づ安堵の胸を撫で下したが、その後から、止め度もない佗びしさがこみあげて涙がわけもなく涙線に押あげて來るのであつた、私は『英雄の覇業みな空し』といふような感慨を禁ずることが出來なかつたのである。

回

私はとぼ〳〵と、重い脚を引づつて、そこを立ち去らねばならなかつた、そこにも、こゝにも餘燼はまだふす〳〵と火を吐いてゐた、電線はきれ落ちて地上にはひまつはつてゐた、それを危ふく避けながら、落人のように東京驛のステーション、ホテルのうすぐらい三階の一室に隱れた。

ステーションホテルの三階には、もう夕暗が、びそかに忍びよせて來たけれども、その宏壯華麗な建築と、絢爛をきはめた內部裝飾をてらすべき電燈は、この一日以來もう輝やかないのである、わびしい暗黑の沈默が、長い夜をこめてつゞくのである、近化文化生活の理想をそのまゝこゝに現出したと信せ

られるホテルの客室は長椅子も、寢臺も、テーブルも、雪白のテーブルクロスも、いつもの通りであるが、そこにはみんな大切な魂がぬけてゐる、力がぬけ切つてゐる、そしてただ空虛なる殿堂といふ感じがつよくうき出してゐる、そこには、たつた三丁の安ローソクがテーブルの上に横はつてゐるし、三本のサイダーの空瓶には、飲料水が、さも高貴な飲みもゝのように保存されてゐる、その對照がいかにも不調和である、ここでは少量の粥を客に出すことにより て、窮乏せる食糧を支へてゐるのである、私はアラスカ丸で貰つた炊出しの握り飯の最後のただ一つを、そこで食べてしまつた、そして清水港以來携帶して來たサイダーの空瓶から、殘りの水をのみ盡してしまつた、もう私には握り飯も、水もないのだ、飢と渴とが、今夜私に襲來するのだと思ふと、私はもうヂッとして居られない、一刻も早く東京から脫出しなければならないといふ感じに追ひ立てられた、この場合『支局員すべて無事』といふ事實さへ確めたなら

東京へ來た私の使命の大部分はまづ達成せられたことに滿足しなければならない、私はにげるがごとく、もの暗いホテルの階段を、ドロ靴にて下りて行つたそして夕日の落ち去つた、たそがれの驛前の廣場に、つかれた足をふみしめてみた、それから大宮まで十二三哩の道を、夜をかけて歩まねばならぬことを、今さらのように省みると、はるかなる感じがひし〳〵と私の心を囚へて放さぬのであつた。

回

暗い墓場のやうな荒寥たる燒原をたどり、たどりして、私はいつしか上野公園の西鄕南洲の銅像前に立つてみた、神田橋は落ち崩れてゐた、私はそこの水道橋の細い鐵橋を一歩、一歩、綱わたりの藝當を演じながら歩いたことを覺えてゐる、神保町から駿河臺下に出で、小川町から須田町の大通りへ出て、それから萬世橋をこゑて上野へ歩いてきたのである、けれどもそれは街といふべき

ものではなくて、ただ荒寥たる墓場でしかなかつた、鬼火のように、兩側には火がもえてゐた、萬世橋際の一棟の倉庫らしい建物は篝火のようにさかむに火の粉を八方に吹きちらしてゐた、電燈のない燒野原の道を照らすには、それは格好の篝火であつた、道行く人は、ただ默々として葬列のごとく、火の粉の下を通りすぎて行くのである、もう東京の人々は、火に對して全く無關心であるかに私には思はれた、火の粉の一つにも驚くべき人間が、もう消防などといふ感じから全く超越して、火をして燃ゆるがまゝに燃えしめてゐるのである、この上もう燒きつくすべき何物もないことを知つてゐる市民は、いまごろ、時おくれに燃えてゐる、迂濶な火事を嘲笑するかにも見ゐる。

私たちには馴染のふかい、いとう松坂屋が、入口の大理石の門柱と鐵の扉とだけをのこして、灰燼に歸してゐるのを見ると、無量の感慨にうたれざるを得なかつた、三越はやけ、白木屋はやけ、松坂屋はやけ落ちてしまつた。東都の

土女を扮飾するために、これらの店がいかに人々に親しまれてゐたことであらう、けれども一切の虛飾扮裝のために文化は一夜にして燒け亡びてしまつた、私は日本文明の總勘定を、はしなくも今度の震災において見出したことを、くれぐれも悲まざるを得ない。

暗の上野の森は、折からふきつける烈風のために、もの凄い悲鳴をあげ出した、空は急に、暗澹たる荒模樣を見せて、今にもあらしの襲ひ來さうなけはひである、見渡すかぎり　焦土からは、餘炎がひら〳〵と風にまひ煽られて、一齊に最後の焰を吐きちらす、それは殘忍なる毒蛇の赤い舌が、銀の薄のなびき伏すように、暗い、暗い地獄の底に荒れ光つてゐるのである、空も、大地も黑暗々々である、そこにゐづくまつて、運命のまゝに委せ切つてゐる無數の避難民の忍從なる姿をどうして涙なしに、直視することが出來よう、風よ、ふくな、雨よ、ふるなかれ、生命の不安と、疲勞とに、絲のごとく心細く打ちふるねて

ゐる市民を、もう、この上に責め、苛まないでくれ。

回

やけ滅びた上野停車場が、暗にうち伏してゐる姿を見ながら、私は再び上野の山下を、日暮里の方へ歩き始めた、貨車や、客車が、無數にまだ燒けつゝあつた、その光りをたよりに、線路づたひに、郊外へ立ち去らうとするのである私の後にも、先にも、二三人づつの人々が暗の線路を歩いてゐる、どこにも不安はない、けれども、私の心が、私をして不安におびえしめてゐるのである、さう考へると横濱の船から、もつて來た自己恐怖のいはれなく、馬鹿々々しいのを笑はずには居られなかつた。

私は、こゝまで來てこんな疲れた脚と、疲れた頭とで、大宮まで歩きつゞけられるかどうかを危ぶむだ、けれども、行けるところまで行つておきたい、そして、行きついたところで、野宿をするばかりであると考へてゐたのである、

『人間到るところ青山白水あり』ではないか、私はもう二夜も、アラスカ丸の甲板で、米俵と新聞紙をしいて、洋服のまゝ ゴロ寢をしたではないか、今夜は、避難民とともに、どこにでも安らかに野宿しよう、そんな考へに制せられながら、寢よげなる野の草原をたづねて歩いて行つた。

けれども、それは一歩、鶯谷驛に入ると、私の期待はすつかり裏切られてしまつた、そこには幾千、幾萬といふ避難者が僅かな家財をかゝへて、すき間もなく、地上に横たはつてゐるのである、秋の夜風よりも、あらしの日の雨を凌がうとする心づかひから、苟くも廂や、屋根のかゝつてゐるところには、一杯の人で埋まつてゐた。青年團や在郷軍人會や、國粹會や、警官や歩哨や、それらの人々か、提灯をふりてらしたり、武器を携へたり、棍棒を引さげたりなどしながら、その間を警戒してゐた、一歩動いてもすぐ誰何されるのである、三歩五歩、ほとんど、槍ぶすまをつくつて、怪しの通行人を警戒するのである、こ

れでは一食、一水のめぐみを得るどころか、露營野宿も、とうてい出來るものではない、寢よげなる草野のふしどを慕ふて來た私は、否でも、應でも、落ちのびるだけ落ちて行かねばならなかつた、私はくらい心にとざされながら、鶯谷から日暮里へ歩いた、根岸では、もう全然、線路づたひに歩くことを許されなかつた、私は仕方なしに、根岸の街道に出た、誰何する提灯の數は、一層數多くなつた『今晩は』、『今晩は』、『今晩は』かういふあいさつを、引つきりなしに、私は受けなければならない、その一人にでも、默つて行きすぎようものならナゼ、默つて通るかと叱責の怒聲がとむで來る棍棒がとむで來る、槍の穗先が、きらりと眼の前へ突き出されるのである、私は、それに對して『ヤア、今晩は』とか『御苦勞さまです』とかいふ受け答へをしなければならないのであつた、要するに『私が日本語を完全に話する日本人であるといふ證據を私の日本語によりて、それらの人々に一々證明しなければならない義務があるのであつた、私はたつた四五町の間に何百度『今晩は』『御苦勞さまです』をくり返へしたか知れないそれは何といふ物騷千萬なことであらう、私はこんなことなら、むしろ燒原となつた須田町の廣瀨中佐の銅像下で、墓場のような淋しい一夜を過した方がどれほどよかつたかといふことをすら考へるのであつた

靜かに、落ついた燒跡は涙ぐましいまでに、聖い感じがする、人なき荒野と化してしまつたあの燒跡ほど、眞面目に、嚴肅な心を有たせるものはない、私はなぜその燒跡で今夜を睡らなかつたらうかと、つくづく殘念になつた。

回

空虛なる東京には、嚴肅なる自然の敎訓がある、それは自然が靜かなる沈默者であるといふことである、郊外にのがれて來て、私は私の『心の沈默』がみだされてしまつたことをつくづくも悲しくも思ふ、そしてたまらなくあの燒野ケ原の東京の靜けさが、いぢらしくなつて來た、けれども私は、矢張り、歩か

ねばならないのである、日暮里驛外の陸橋を渡るとき暗の中から突然歩兵の銃劍が私の胸さきにつきつけられ『とまれッ』

これが戒嚴令の東京であるのだといふことを、私は、直感した、それはもう午後九時、夜中の通行の許されない筈の時間であつた、私はもう私の徒歩の力をもつて東京を脱出することすら許されないのであつた。

私は、突嗟に、こゝから『汽車にのります』と答へた、

『よし、行けッ』

じかし、その夜、私のゝるべき汽車のあるかないかは知らない、たゞ、私は日暮里停車場の、幾萬の人いきれの中へ、すゞ〳〵と入つて行かねばならなかつた。

回

いま廢墟の東京は、偶然の一大シヨックによりて、外部的にも、内部的にもつとも自然なる分解作用が行はれてゐる、焦土にかぢりついても東京にふみ止まらうとするものと、東京に失望落膽して、あるひは東京に不安、恐怖を感じて、一時も早く、故郷に歸り着かうとするものとの二つが、判然と流れをなして區別されてゐる東京といふ都會に愛着をもちながらも、目前の飢餓のために、心ならずも、避難者の流れの渦にまきこまれて、都落ちをするものもあらう、けれども、それらを一體として、矢張り、東京の地を離れ去るものと、止まるものとに二大別することが出來る。

ふみ止まるものにも、流れ行くものにも、ともに人生の限りなき苦艱がある二百萬の東京市民はいづれも今度の地震と火災に對して、一つづゝの尊い體驗を有つてゐるわけである、その體驗はたゞ一つの地震と火災との共同融合の現象から生れた事實に根ざしてゐるのである、この事實によりて、東京がいま一大分解作用を起してゐるのである、それが東海道筋を徒歩にて西へ、東北本線

を東へ、信越線によりて北へ、中央線によりて西北への通路をとつて、絡繹として流出する人間の大移動なつてゐるのである。

東京といふ都會の要素であるところの東京市民が、流離困憊の姿をもつて、ちり〴〵に離散して行くのを、何と見るべきだらうか、いまや、日々、幾萬の人々が、海嘯の勢ひをもつて地方に流れ出しつつある、それは東京といふモンスターが、地方に遊離し、分散しゆきつゝある姿である、それは東京がそれの自然の勢ひに應じて解體し、分化しつゝあるすがたである。

回

たとへば、東京は日本の心臟である、日本の心臟であるところの東京が、外部的の一大打撲傷をうけて、その血が一時に奔流してゐるのだ、いまの東京の狀態である、そしていまの日本の狀態である、逆流するものと、正流するものとが、もつとも急激に混亂し、交流しつゝあるのである、病者にたとふれば、それは絶對安靜を保たねばならない危險期に立つてゐるのである、この危險期を無難に經過し得るかどうかは、一に日本國民すべての沈着にして、冷靜なる努力に待たねばならない。

東京の震災は、たゞに東京の受難であるばかりでなく、實に日本の受難である、この受難は日清戰役よりも、日露戰役よりも、世界戰爭における場合よりもさらに重大である、これは東京または横濱といふ大都會のなやみだけでなく一般日本國民のなやみである、それがいま不完全にして、乏しい輸送力によりて、東京から地方へ分散され、傳播されつゝあるのである、震災の影響といふものが、いま急激に全日本に亘りて波及しつゝあるのである。

モーゼに率ゐられた埃及人が、その昔、カナーンの地に移り住むべく、一大集團をもつて移動して行つたように、罹災民はいま一大集團をもつて東京を脱出しつゝある、歴史は時ありてか、人類に大移動を行ふことを傳へてゐる、聖

地恢復のために、十字軍の小亞細亞に集まるものや、お影參りと唱へて、伊勢大廟へ殺到するものや人類には、さうした大移動を行ふことがある、東京を離れて行く人人の一大移動は、ていど、それである、私はそこに分解し、離散しつゝある東京を見た。

回

避難民のむれは、東京近郊の小さい範圍にすぎないと私には思はれてゐた、はじめ東京を脱出して大宮まで着いたならば、宿屋もあり、食物もあり、水もあるだらうと考へてゐた、しかるに汽車が大宮についたとき、そこにも數萬の避難民が驛内驛外に群らがつてゐるのを見て、私は東京の離散のあまりに大きなのを感ぜずには居られなかつた、驛員に宿屋の世話を頼むでみたが『それはたうてい駄目です學校か、役場へ行つて、そこで泊めてお貰ひなさい』といつた、私は大宮で、ゆつくり足をふみ延ばして休むことを斷念して、そのまま、再び同じ汽車にのつた。それは高崎で夜が明けた、篠の井へ着いたのは午後二時すぎてゐた、沿道いたるところに、避難民は汽車のつかれを休めるために、ごろごろとしてゐた。東京を離れるにつれて、東京の震災の影響のます〳〵大きく擴大してゆくことを知つた、水中に投ぜられた一つの石の波紋は、輪をかいてみる〳〵大きくなつてゆくように、それの影響は、いまやのこるところなく全日本の生活を動かしてゐるのである、私は一地點におこつた災害がこんなに急激に全日本の生活に刺戟を與へようとはいままで少しも想像しても見なかつたのである。

四日の夜十時、日暮里から汽車にのつて、六日の朝八時ごろ、名古屋へ歸りつくまで三十四時間ばかりの汽車中を、ずつと立ちつゞけた膝をのばすことすら出來ないで立ちつくした、私の列車内には地震のゆり始めた一日の正午のまゝの姿で、汽車にのつてゐる人が多かつた、たすきがけのまゝで飛ひ出して來

た若い女達が、車中でもやはりそのまゝの姿でゐた。エプロンをかけたお內儀さんが、黑くよごれたエプロンのまゝで乘つてゐるのも、いぢらしかつた。たすき位は外づしてもよかりさうに思はれたが、そのまゝ日本のはてまでのつて行くのであらう、地震と火事との心の動搖が、まだ少しも安まつてゐないのである。

回

沿道各地における救護班の活動は、ほんとうに涙のこぼれるほど嬉しいものであつた、どうして機敏に、かうも完全に罹災者を慰問することが出來るだらうと思はれた。

握りめしと、飲料水とが、十分豐富にそれらの乘客に供給された。牛乳、氷パン、西瓜、菓子などまでが與へられた、醫藥の手當も十分であつた、一日以來、一個の握り飯にすらありつけなかつた人人は、汽車にのつて、始めて飢渴から救はれるのであつた。そこには不幸なる避難者に對する溫かい同胞の血と涙とがこめられてゐた同胞相救ふといふ感じがとくに日本人の間に美しく發達してゐることを見た、私はやけ落ちた都市の物質文明の底から、日本人の精神的に偉大な光りが、芽をふいて輝やき出し　ことを、くれぐれも誇るべく、有り難いことに思はれた、廢墟の東京から、精神的に充實した新日本の文明が、國內に放射し出したことを、ふかく感じないわけには行かぬ。

八

更に氏は、災害の大に對して同じ題下に次の如く述べられてゐる。

回

旅順の白玉山頭には、日露戰役の殉難者の英靈の合祀されたる旅順神社がある、海陸の戰歿者を合せて二萬四千人が祀られてゐるといふことである。半歲

以上に亘つた旅順攻圍軍の犠牲者が二萬四千人であるのに、今度の東京の大火では、本所被服廠の廣場だけで、三萬二千の燒死者があるといふではないか、一晝夜にして三萬二千の死者をその廣場だけで出してゐるのである、戰爭の犠牲よりも地震と大火との犠牲の恐ろしいことが想像せられるのではないか。

ヴェルダン要塞の突擊にはドイツは二哩の戰線に、五十ケ師團の兵力を入れかへ、つめかへて、一週間、息もつかずに責め立てた、その時の死傷者が二十萬であつたと傳へられてゐる、しかし、今度の大火では、ほんの一晝夜で東京と横濱とを合せて、十萬以上の死者を出してゐることだらうと想像せられる。

すぎしヨーロッパの戰爭は、人類歷史ありて以來の、一大破壞作業であつたといはれるが、ヨーロッパの大都市のどこにも、今度の東京と横濱とが蒙むつたほどの慘害をうけてゐない、革命と飢餓とのために空洞となつたといはれるウインナーにしろ、ペトログラードにしろ、モスコーにしろ、日本の東京、横濱におけるような慘虐な破壞をうけてゐないのである。

歐洲北佛の戰場は一木、一草の微にいたるまで砲彈の慘禍をうけざるはないといはれてゐる。戰爭地帶では、一匹の昆蟲すら生きのこり得ないほどに、砲彈はすき間なく發射されたといはれてゐる、ノー、ヲームス、ランド（蟲なき土地）の形容詞が、戰爭の慘虐をかざる言葉として用ゐられてゐる。

それは今度の東京と横濱との火事に比べたならば、まだ〳〵いふにも足らぬ優しいものである、東京でも横濱でも、地上に横はる限りのものを燒きつくして一物も餘さないのである、鴨長明がその昔方丈記で叙述したように『七珍萬寶倉にみちれども及ばず』といふ實景が今眼のあたり東京と、横濱とに現出されてゐるのである、暴虐なるネロの火が、ローマを燒きつくしたように、東京および横濱をやき滅ぼしたのである。

徳川氏の三百年と、明治の五十年とをもつて築きあげられた東京市は、一朝

にして灰燼に歸してしまつた。武藏野の原頭を蔽ひつくした近代文化の精粹が忽焉として滅びうせて、もとの武藏野に還元したのである。それは武藏野原にふさはしい尾花もなく、露もなく、月もなく、蟲の音もないところの荒寥たる砂漠の野原であるけれども、近代文化の殘骸をみにくゝ横へてゐる武藏野原となつてしまつたのである。

以上、小林氏の視る如く、東京市は一朝にして灰燼に歸し、近代文化の殘骸をのみとどめて、忽焉として滅びうせてしまつたのである。しかも二百萬市民のうちの四分の一――即ち五六十萬の人は、再起をかへりみるの遑もあらばこそ、恐怖と飢えに追はれて、先きを爭ふて焦土の東京を逃げ出してしまつたのである。

殘つた人といへども、慘狀のあまりに甚だしいのにみんな悲觀し、沮喪し、自失し、呆然として、なすところを知らないのだつた。時も時、遷都といふ噂がたれからともなく傳へられて、彼等の心を一層暗ふした。

我が東京には陛下がおはします！

東京市民の何よりもの誇りであつたそれさへも、やがて奪ひ去らるるのではなからうか？。勿論、燒き盡されたからといつて、居殘つた百五十萬あまりの人がそういつまでも自失し、呆然として居よう筈はないのだ。否、焦土の東京に居殘つた人たちこそ、ほんたうに東京を愛する人なんだ。だから、よしんば無一物になつたにもしろ、本能的に、破壞から建設へ、空虛から充實へ、萎縮から發展へのめざましい戰ひを起さずには居ないだらうが、陛下がおはしますといふ、焦土の中に取り殘されてゐる唯一の光りまでを、此の際に奪はるるといふ事は、あまりにむごい運命と言はなければならぬのである。しかもそれは人爲的に與へらるゝ不幸ではないか

心なき地方の新聞は、彼等のなやみをよそに、且つ、陛下の御思召のほども考へずに、不謹愼にも早くも遷都說を堂々と高唱しはじめたのだつた。

果然、次のやうな大詔が煥發された。まことに恐れ多い事といはなければならぬ東京には最初、災害と同時に、戒嚴令が布かれた。次いで非常徵發令が發布された、其後更に、暴利に關するもの、流言蜚語に關するもの、支拂延期に關するもの等の三大緊急勅令が發布されたのだつたが、今亦、國民一般に對し大詔が煥發されたのである。

畏れ多い事ではあるが、今度の災害については、兩陛下をはじめ奉り、攝政宮殿下には如何に御軫宸を惱ませ給ふた事であらうか。我等はたゞ、子孫につたへて御鴻恩の萬一に副ひ奉るべきである。

當時下し賜はつた勅語は、次の如きものであつた。

勅語

朕神聖ナル宗祖ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成蹟ニ鑒ミ皇考中興ノ皇謨ヲ繼承シテ肯テ怠ラサランコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ヒニ宗祖ノ神佑ト國民ノ協力トニ賴リ世界空前ノ大戰ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツヲ得タリ曷ソ圖ラン九月一日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ倒壞男女ノ慘死幾萬ナルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リ炎焰天ニ冲リ京濱其他ノ市區一夜ニシテ焦土ト化ス此間交通機關杜絕シ爲ニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心洶々トシテ倍々其慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ凄愴ナルヲ想知セシム朕深ク自ラ戒愼シテ已マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防シ難ク只速カニ人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテハ非常ノ果斷ナカルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其ノ宜シキヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保障ノ爲メニ多衆災民ノ安固ヲ脅カスカ如キアラハ人心動搖シテ停止スル所ヲ知ラス朕之ヲ深ク憂惕シ既ニ在朝有司ニ命シ臨機救濟ノ途ヲ講セシメ且ツ焦眉ノ急ヲ拯フテ以

テ惠撫慈養ノ實ヲ擧ケンコトヲ欲ス

抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スルトコロナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メストハ雖モ依然トシテ我國都タルノ地位ヲ喪ハス之ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ恢復スルニ止マラス進ンテ將來發展ヲ圖リ以テ卷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス惟フニ我カ忠良ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其慶ニ賴ランコトヲ切望スヘシ之ヲ慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノコトヲ審議調査セシメ其ノ成業ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬遺憾ナキヲ期セントス在朝有司克ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民ノ救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ鎭壓シ民心ヲ安定シ一般國民亦克ク政府ノ施設ヲ翼ケテ奉公ノ誠悃ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ムヘシ朕千古無比ノ天殃ニ會シテ邺民ノ心彌切ニ寢食爲メニ安カラス爾臣民夫レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

摂政名

大正十二九月十二日

内閣總理大臣副署

これを拜讀してたれか大御心の有難きを思はざるものがあらう。別けて『千古無比ノ天殃ニ會シテ邺民ノ心彌切ニ、寢食爲メニ安カラズ』とまでに罹災民を憐れませ給ふ大御心のほどは、罹災民ならずとも、甚大の感銘を覺へざるを得ないのである。

しかも、世に傳はる遷都說に對しては『一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其ノ舊形ヲ留メズト雖モ、依然トシテ我ガ國都タルノ地位ヲ喪ハス』と、慰撫の詔を下し給ふたのである。

徒らに、土地の脆弱を楯に、地震の中心地たるを楯に、遷都説を云々したる輩はすべからく愧死すべきである。何んとなれば、たとへその説をなす所以が、陛下の御身を案ずてふ、まごゝろのあらはれによるものだとするも、京都の地は果して永遠に安全であらうか。自然のなす災は、時と場所とを撰ばないのだ。

が、以上の理由による遷都説はまだしもとして、中には、火事場を荒す泥棒の類に似た血も涙もない、利己的な説をなすものもあつたが、彼等の心なきプロパカンダが遂に上、陛下の大御心を煩はし奉つた事は、かへすがへすも憎むべく、且つ、畏れ多い事である。

か、大詔の煥發によつて、彼等焦土の東京に殘れる罹災の市民たちは、意を安んじて力を再起へとそゝぎ得らるゝのだつた。

のみならず『朕宰臣ニ命ジ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノコトヲ審議調査セシメ、其ノ成業ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ、或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ、籌畫經營萬遺憾ナキヲ期セントス』と、詔せた有難き大御心は、やがて復興院の組織となつて、時の各大臣、其他の人がその委員に任命されたのだつた。

焦土の東京は今や國家的に復活されやうとするのだ。復興院の總裁及び委員は次のやうな顔ぶれであつた。

總裁　内閣總理大臣　伯爵　山本權兵衛

委員　外務大臣　男爵　伊集院彦吉

内務大臣　子爵　後藤新平

大藏大臣　井上準之助

陸軍大臣　男爵　田中義一

海軍大臣　財部彪

司法大臣　平沼騏一郎

文部大臣　岡野敬次郎
農商務大臣　田健次郎
逓信大臣　犬養毅
鐵道大臣　山内一次
政友會總裁　子爵　高橋是清
憲政會總裁　子爵　加藤高明
日本銀行總裁　大石正巳
樞密顧問官　子爵　伊東巳代治　市來乙彦
貴族院議員　子爵　澁澤榮一
貴族院議員　江木千之
貴族院議員　子爵　青木信光

貴族院議員　和田豊治

以上の外に、右審議會幹事として、内務次官塚本清治、内閣書記官長樺山資英、法制局長官松本丞治の三氏が任命されたのだつた。

九

或る人は今度の災害を天刑だといつてゐる。官紀は濫れ、道義は地に落ち、國民は奢侈に流れ、國家の將來に甚だ憂ふべき現象をきたした場合は、天は大いなる災ひを下して、それとなく輩正を敎へ、緊張を訓へるのだといつてゐる。

その例として、天明の大火、安政の大地震當時の、すべてに緩んだ醜い世相の樣を擧げてゐるが、現時の世相！。それは決して美しいものではなからう。

たしかに官紀も濫れてゐる。男女の風儀も甚だしく紊れてゐる。道義は勿論、人はただ私利私慾に耽り、奢侈の風が甚だしい。

『國家の將來はどうなるだらうか？。』

心ある人はひそかに案じてゐたのである。恰度その矢先きでもありするので、某氏の所謂天刑説も、幾分うなづかれぬでもないが、それにしても、今度の災害はあまりに甚だしいのである。

勿論、國家的の大災害であるのはいふまでもない事で、災害故の損失は、ひとり罹災した人のみに限られた損害ではないのである。

多くの人を横死せしめた、それも、我等は同胞といふ立場から、共に悲しまざるを得ないのである。其他文化の源泉たるべき幾多の寶庫を空しくした――たとへば帝國大學の圖書館の如き、實に五十萬冊の多數の圖書を燒いたのであるが、その中には世界的の誇であつた二三の文庫もあるのだつた。それさへも烏有に歸し、加ふるに五十億餘の財を空しくした事といひ、實に國家的の一大損害であつて、我等は生き殘れる罹災者と共に、長く死者の靈を吊ひ、より強き努力をもつて、災害によるあらゆる損失を徐々に補はなければならぬのである。

と同時に、現時の世相の醜きに鑑み、すべからく先づ自ら戒慎して、天の意にかざらん事を期すべきである。

先づ、東京に於ける主要な建物の燒失或は倒壞したものを、左に記して見よう。

官署　逓信省、同貯金局、農商務省、内務省、文部省、大藏省、帝室林野局、維史料編纂局、專賣局、印刷局、淺草專賣支局、會計檢査院、中央電話局、中央職業紹介所、東京株式取引所、東京米穀取引所、博物館（陳列品の損傷）、氣象臺、東京砲兵工廠、警視廳、特許局、警察講習所、麹町署、日比谷署、中央郵便局、神田區役所中央電話局、日本橋區役所、久松署、堀留署、新場橋署、細菌檢査所、第二消防所

愛宕署、芝區役所、芝郵便局、芝電話分局、幸橋稅務署、遞信官吏練習所、海軍涉兵廠、月島警察署、北紺屋署、築地署、上野警察署、象潟署、第五消防署、相生署原庭署、太平署、本所區役所、西平野署、洲崎署、扇橋署、深川區役所、第六消防署。

御所　高輪御所、芝離宮、東伏見宮邸。

華族邸　島津公爵邸（破損）、山縣公邸、鍋島侯邸、安田邸、大倉邸、集古館。

大使館、公使館　米國大使館、英國大使館（破損）、伊國大使館、佛國大使館、支那公使館、獨逸大使館（破損）、和蘭公使館。

學校　帝國大學內、圖書館、文科、法科、生理學、醫化學、藥學、數學各敎室及び山上御殿、其他、海軍大學校、明治大學、日本大學、東京商科大學、專修大學、中央大學、曉星學校、佛英和女學校、女子高等師範學校、外國語學校、獨逸協會專門學校、虎の門女學校、士官學校豫科、大倉商業、國學院大學（倒壞）、日本齒科醫學專問學校、東京齒科醫學專問學校、開成中學、東京商工中學、女子職業、慈惠大學、攻玉舍中學、正則中學、立敎中學、工藝學校、小學校百〇七校。

新聞、通信社　二六新聞社、時事新報社、每夕新聞社、國民新聞社、大勢新聞社やまと新聞社、東京朝日新聞社、讀賣新聞社、東京每日新聞社、電報通信社、帝國通信社、廣告社、弘報堂、萬年社。

政黨本部　政友會本部、革新倶樂部。

會館、倶樂部　水交社、交詢社、同氣倶樂部、日本橋倶樂部、美術倶樂部、神田青年會館、中華民國青年會館、朝鮮青年會館、日本女子青年會館、中央佛教會館、明治會館、基督教聯合會館、日本電氣倶樂部、如水館、私立術會館、東京會館。

銀行、會社　日本銀行（屋上部燒失）、村井銀行、朝鮮銀行、山口銀行支店、日本貯蓄銀行、第一銀行、第三銀行、第百銀行、安田銀行、貯藏銀行、十五銀行新橋支店、第四銀行京橋支店、同日本橋支店、加島銀行、森村銀行、三井物產、同合名、同鑛山、塩水港製糖、大日本製糖、明治製糖、東洋製糖、林本源製糖、臺灣製糖、大倉組、星製藥株式會社、第一相互ビルデング、內外ビルデング（倒壞）、郵船ビルデング（大破）、東京電燈株式會社、東京瓦斯會社、東京瓦斯電氣株式會社（倒壞燒失）、同大森工場（倒壞）、川崎明治製糖、川崎東京電氣株式會社（倒壞）、川崎富士瓦斯紡績

株式會社（倒壞）、高田商會。

病院　赤十字社（芝）、順天堂病院、明治病院、樂山堂病院、濱田病院、金杉病院杏雲堂病院、長谷川病院、中原病院、聖路加病病院、林病院、東京顯微鏡院、鐵道病院、慈惠病院、阿久津病院、井上眼科病院、矢の倉病院、日本橋病院、東京施療病院。

工場　芝浦製作所、日本電氣會社工場、沖電氣製作所、藤倉電線、古河伸銅所、芝浦瓦斯タンク（爆發）、國文舍、秀英舍、東洋印刷、築地活版所、博文館。

劇場　帝劇、新富座、市村座、明治座、有樂座、公園劇場、十二階（倒壞燒失）、國技館。

大商店　三越呉服店、白木屋呉服店、松屋呉服店、松坂屋呉服店、高島屋呉服店
丸善、明治屋、龜屋、資生堂、天賞堂、大勝堂、服部時計店、山崎洋服店、伊東文
具店。

社寺、教會堂　神田明神、深川八幡、深川不動、平河天神、湯島天神、飯倉八幡
形人町水天宮、芝神明、日比谷大神宮、青松寺（芝）、淺草本願寺、築地本願寺、妙
見寺（淺草）、本覺寺（淺草日切）、ニコライ會堂、本郷中央公會堂、天理教本部、救世
軍本部、銀座教會。

料理店、待合、遊廓　築地精養軒、福井樓、龜清樓、柳光亭、深川亭、常盤、金
龍亭、大又、花月、新喜樂、河内家、山口、田中家、ひさごや三河家（赤坂）、八百
勘（同）、錦水（同）、湖月、松本樓、蜂龍、大村家、吾妻家、田川、吉原遊廓、崎遊遊
廓。

停車場　新橋驛、濱松町驛、有樂町、神田驛、萬世橋驛、上野驛、兩國驛、汐留
驛、飯田町驛、御茶水驛。

車庫　新宿車庫、濱松町車庫、有樂町車庫、龜澤町車庫。

橋梁　厩橋、吾妻橋（大破燒失）、永代橋（大破燒失）、相生橋。

以上は代表的建築物の重なるものであるが、警視廳の調査――九月廿二日――に
よる東京府下の被害實數は、左の通りである。

死者總數　七萬一千六百十四名。內、燒死者、五萬六千七百七十四名、溺死者、一萬一千二百三十二名。壓死者、三千八百〇八名。

負傷者　三萬一千六百七十二名。

行方不明者　三萬八千九百八十名。

被害家屋　四十萬一千三百三十六戸、內、神社佛閣、六百四十四、官署學校、七百二十六、病院、九十三。

電柱　二萬八千本。

樹木　十三萬九千本。

船舶　沈沒船五千三百隻、燒失船九百四十六隻。

電車　八百五十臺燒失。

燒失總面積　一千〇六十二萬七千二百坪、內、市部、一千〇十五萬八千二百坪。

郡部、四十六萬九千坪。

其他東京近縣の被害數はほゞ左の通りである。

橫濱市、死者、二萬三千七百六十七名、負傷者、四萬〇九百十名。燒失家屋、七萬戸。

神奈川縣　死者、四千三百三十一名、負傷者、二萬三千八百八十三名、燒失家屋七萬五千六百〇一戸。

靜岡縣　死者、三百四十名、負傷者、一千二百八十四名、燒失家屋、二千〇六戸半壞家屋、四千四百四十五戸、燒失家屋、五百三十九戸。

千葉縣　死者、四百三十二名、傷者、一千四百六十二名、燒失及び倒壞家屋、八千六百二十九名。

埼玉縣　死者、二百〇三名、傷者、三百七十九名、燒失家屋等未詳。

在留外人の罹災狀況については、各國大使館及び公使館等にて、それ〴〵調査中であつたが、死者のみの發表は左の通りであつた。

英國　京濱在留者二千六百人中、死者七十四名。
米國　京濱在留者五千名中、死者、七十六名。
佛國　京濱在留者三百名中、死者、二十五名。
伊國　京濱在留者三十五名中、死者、一名。
白國　京濱在留者十五名中、死者一名。
露國　京濱在留者八百名中、死者、六名。
中華民國　未詳。

以上の被害數は、未だ正確とはいへないが、實數に最も近いものとして、各機關の調査の結果を照し合はした數字なのである。

十

焦土の東京と一口に言ひはするが、牛込、四谷などは、ともかくも火災だけは免れたのだ。尤も、横濱とてもやはり、山の手の一部は危ふく火災を免れたのだつたが、東京に比較して、横濱はより甚だしい災害を蒙つたのだつた。

災害後の横濱は、如何なる姿と變り果てゝゐるのであらうか。當時、某氏が名古屋新聞に寄せた左の一文は、最もよく、災害のあとの憐れなさまを物語つてゐるではないか。

私は今、此の手紙を横濱港に碇船してゐる郵船の丹後丸のサルーンで書いてゐるのです。

二日の早朝貴紙を通じて京濱地方の大震災の事を知つてからと云ふもの、私の胸は言ひ表はし難い焦燥と不安の思ひに閉されてしまひました、そして其の日は終日通信社や新聞社の前掲示を見て暮しました、二日、其の晩の十時十分の長野行で發たうと思ひました。が赤羽から東京を通過して横濱に行くと云ふ事が、危險は兎も角、如何にしても困難らしく思はれましたので一層神戸から船で行かうと思ひ、翌三日の朝郵船の支店に行つて見ましたら四日に出帆する箱崎丸のキャビンをリザーヴする事が出來ましたので、其の日の特急で神戸に行き一泊して、翌四日の十時に同港を出帆しました。

紀州の沖を廻ると陸地が見えなくなり、やがて靜かな浪の上に太陽が沈んで夜が來ました。

乘客悉く近親知己又は會社の安否を訊ね行にかうとする人達なので、夜が來ても誰一人としてベットに就かうとする者とてはなく、サルーンに、スモーキング、ルームに、又は甲板に集まつて、如何にして上陸するか、上陸が出來たら何うして目的地に行かうかと左樣した事を語り續けてゐるのでした。

一時頃一旦ベットに入つた私は、熱さと不安とで、どうしても寢つかれないのでまた起きて甲板に出てとう〳〵そこで夜を明かしました。眞つ黑な海の彼方に、二十幾日かの月が上つてやがてその光が黎明の色に薄れて行く頃、左舷の方に山脈の續くのを眺め、それから絶えず山影を見つゝ船はひた走りに走つて、八時には東京灣に入りました。

灣に入つて直に目に着いたのは、横須賀の方の空から天を覆はん許りに立ち上る黑煙でした。恐らく重油倉庫が今も尙燃えてゐるのでせう。横濱の方はと見ると此處にも黑煙が立ち上つてゐます、本牧の岬を廻ると港内の景色が眼界

に入つて來ましたが其れは何んと云ふ變り果た光景だつたでせう。海岸から山の手にかけて、建ち並んだ洋館……あの横濱を故郷とする者が衿誇の思ひをもつて飽かず眺め入る、あの牡麗な景色は今は何處に？

市街の東南を劃る山手の丘つゞき、あすこにはローマン、キャソリックの尖塔が二つ高く聳へて、夕暮れその尖端の十字架が金色に輝く頃、その高塔からアンヂエラスの鐘の音が靜にか響渡つて、横濱の人々を平和な休息に入らしめたものでしたが、而も今は、見渡す限り一面の焦土と化して、まだ燒け殘つてゐるものでもあるのか白い煙が朝靄のやうに丘全體から立ち上つてゐるのみでした。

市街の方はと見ると、此處にも一面に、白い煙のたゆたふ中から僅に倒れ殘つた建物―三井物産、記念會館、川崎銀行、正金銀行、その他二三の建物のフレームのみが立つてゐるのが見えますのみです。望遠鏡で見ると山下の埋立地

から海岸へかけて一面に人垣を築いてゐます。恐らく悉く罹災民なのでせう。家と云ふ家は皆崩壞して石、煉瓦が赭白く堆くなつてゐます。

昔思へば苫屋の煙り
ちらりほらりと
立てりしところ

私は横濱市歌の此の一節を思ひ出したのでした、昔ならぬ今、目の前の横濱は只白い煙があちらこちら立ち上つて荒寥たる廢墟にすぎないのです。

港の内外には救援のために來航した軍艦や汽船が無數に集合して空には水上飛行機がプロペラの爆音高く飛翔してゐるのを見た時、何とはなしに心強いやうな感じを誰しもが持つたのでした。

船は港外に碇舶しましたが、上陸が許されず、とう〳〵日暮に至りました、六時頃になつて私は横濱に上らうとする人々の群に交つつ子安丸と云ふ小蒸汽

船に移りました。

而し小蒸汽船は私達を横濱に運ぶ代りに此の丹後丸に運んで來ました。それは夜に入つての上陸は非常に危險だから、港外から港内に入る間に暮色の迫つて來るのを見た船長の考へで、一夜を此の船に明かさせて明早朝に上陸させる事にしたのだそうです。

此の船は避難民で一ぱいです。私達はその人々に交つて一夜を明かす事にありした、が勿論船室は避難者で充滿してゐるので、皆アッパーデッキに、ゴロ〳〵と轉がつて夜を明すのです。

夜の暗が海面を覆ふと、碇舶中の船には燈火が輝き出しました。而し、あの一週間まへ迄は、幾十萬の燈火の輝きに晝を欺くやうだつた横濱市街はたゞ一つの暗黑の塊となつて、晝間白く見えた煙が赤い〳〵焔となつて一つ二つ三つ……丁度十一箇所から立ち上るのを見るのみです。

東京は焦土より出でゝ焦土に月の入るてふ燒野原となつたのだが、横濱もやはり苫屋の煙ならぬ燒け殘りの高層な建物の外形だけが、ちらりほらりと殘つてゐるのみである。

商品の輸出に輸入に、海外への旅に、内地への遊覽に、人や品物を乘せて、大船が絶え間なく出つ入りつした、横濱港の賑ひは、こゝしばし見られなくなつて了つたのである。

横濱市の復活！。それも容易な事ではなからう。彼のサンフランシスコの大地震でさへも、被害の程度は我が國の此度の大地震ほどに、ひどくはなかつたのである。それでゐて、サンフランシスコの市中には、今も尙ほ此處彼處に、十數年前の震災の跡がそのまゝに殘されてゐるのだ。大東京、大横濱の再生は、恐らく今後十年二十年の歲月の經過をもつてするも、絶對に望み得られぬ事ではなからうか。

しかし、我が國には人爲的の禍に加ふるに自然の大災害――たとへば、大火につぐに水害、水害につぐに火山の爆發、さては大地震といつた風に、殆んど絶え間なく災害の襲來を受けてゐる。從つて、建設への努力も意外に強いのである。否、從前にもまさる建設を、いつもしてゐるのである。

近くは大阪の南北兩區の大火、及び東京の神田區の大火などがそれで、一時に、一萬二萬といふ多數の家を燒かれても、或は三年を出ないうちに、或は五年を出ないうちに、立派に、しかも從前にまさる家屋を建て盡して、大火事のあとを偲ぶ何ものをも見せないのだ。

要するに、我が國は世界屈指の災害國で、不幸な誇を持つ我等ではあるが、倒れてもなほやまぬ偉大な力は、さうした方面にも遺憾なく發揮さるゝのだ。敢てサンフランシスコの、いまだ整はざるを見ても、決して悲觀すべきではなからう。

地震は昔ながらに恐ろしいものである。我等の祖先が、地震をおそれ、雷をおそれ、火事をおそれ、親爺をおそれたと同樣に、我等もやはり、地震をおそれるのである。火事をおそれるのである。

勿論、祖先と我等とは、時代を異にし、所謂文化の程度に、殆んど較ぶべくもない甚だしい相違がありはするが、大自然の偉力のまへには、文化の力も科學の力も何等、我等のたのみとなり得るものではないのだ。

が、それは、我等が人間の微力をもかへりみず、科學の力をもつて、常に自然を征伏しやうとし、反抗する事にのみ努めてゐる、その努力がひいては、天をも地をも恐れぬといつた風な惡心の增長となり、世はまさに人面獸心の人非人をもつて充されやうとしてゐる醜惡も亦甚だしい現世相を、それとなく戒めんが爲めに、天は

わざと、單に我等の無力をあざ嗤ふやうな樣をよそふて、今度のやうな恐るべき一大災害をもたらしたのではなからうか。

何れにしても、我等が祖先に向つて常に誇りとしてゐる文化の力も科學の力も、自然の大偉力に對しては全くの無力で、一たび一大災害に面接せんか、我等はやはり祖先と同じ恐怖を感じ、同じ憂き目を見なければならぬのである。祖先と我等といふ、時代のへだたりも、文化の相違もあつたものではないのだ。

自然は何んといふ偉大なる力を持つてゐるのであらうか。

古來我が國には、我等が地上に於ける第一の恐怖に數へあげてゐる地震の數が極めて多いのである。否、世界屈指の地震國として、多くの研究材料をつねに、世界の地震學者の前に提供しつゝあるのだ。今度の大地震なども、やはり世界的の新記錄をつくつたのである。

勿論、大地震はひとり我が國にのみあると限つては居ないのだ。明治四十二年のサンフランシスコの大地震をはじめ、シシリー島の激震、及び、明治三十五年のグワテマラの激震、トルキスタン、カシユガル地方の大激震、カーカサスカマフの大地震、同三十三年及び三十五年の、メキシコに於ける兩度の大激震、同三十二年のアラスカの大地震、同三十年の、アッサムの大地震、同二十八年の、印度東北部の大激震など、數へあげて來れば、外國にも時々、大地震があるのだ。中でもアラスカの大地震には、恐るべき大海嘯が伴ふて實に世界的の大慘事をもたらしたのだつた。

以上は最近に起つた外國に於ける重なる地震であるが、古來我が國に於ける大地震の數は、實に數千の多きにのぼつてゐるのである。

以下すこしく、地震に關する歷史を述べて見よう。

有史以前の事は知る由もないとして、我が國の歷史上に殘されてゐる日本最初の大地震ともいふべきは、天武天皇の大寶年間に起つたものが、先づ日本に於ける最

初の大地震といはなければならぬ。

以來、記錄に殘る大地震と名づくるものゝ數は、實に二千を越えてゐる有樣であるが、天武天皇の大寶年間といへば、今から千二百三十餘年前のことで『日本書記』には當時の地震を次のやうに記してゐる。

――その年の十月二十四日の夜、國內を擧げて大地震あり。男女東西に泣き叫び官舍、民家、倉屋、寺塔、神社の倒れくづるゝものその數を知らず、別して、伊豫土佐の兩國の被害最も甚だしく、伊豫の溫泉は爲めに止まり、土佐にては田苑五十餘萬頃は沒して海となれりとある。

其他、寶龜元年五月二十五日の遠江の大地震には、天龍川が塞がつて了つたのであつた。次いで、弘仁九年七月の、相模、武藏、下總、常陸、上野、下野の六國に亘る大地震。承和八年の伊豆の大地震。元慶二年九月二十九日の、關東諸國の大激震。永亨五年九月十六日の、相模、甲斐、陸奧の諸國に亘る大地震。明應七年八月

二十五日の、伊勢、遠江、三河、駿河、甲斐、相模、伊豆の諸國に亘る大地震は、有史以來の大地震ともいふべきもので、以上のうちの海に面した國は、大海嘯の爲めに甚だしい損害を受けたのだつた。

更に、大永五年の相模の大地震。天文二十二年の、同じく相模國の大地震には、今度の大地震と同樣に、鎌倉は全滅し、鶴ヶ岡八幡の堂社は全部倒壞したのだつた

越えて天正十八年十月二日の、江戸の大震災。次いで有名なのは、慶長元年の大地震であらう。此の年の七月九日には、九州全體に、同十二日には、山城に大地震があつて、彼の『地震加藤』の芝居は、此の日の加藤淸正の伏見城に於ける誠忠を物語つたものである。

越えて慶長九年十二月には、武藏と相模の兩國に大地震があり、爲めに總房半島の海濱、及び、駿河、伊勢等の海濱は、大海嘯に襲はれて、おびただしい死傷者を出したのだつた。

更に、寛永十年一月二十一日の、相模、駿河、伊豆の諸國に亘る大地震には、相模の被害最も甚だしく、小田原は全滅し、箱根山は所々崩壞し、恰度今度の大地震と同じやうな損害を被つたのである。

ついで正保四年五月の、武藏、相模の兩國の大地震。慶安二年の江戸の大震災。及び、元祿十六年十一月二十二日の關東の大地震などは、最も有名なものである。

此の元祿十六年の大地震には、甚だしい海嘯が伴ふて、相模の海濱、總房半島の海濱は爲めに甚大の害を被つたのだつた。のみならず、餘震は年を越えても猶ほ歇まず、人々はいつまでも惴々とした心もちで居なければならなかつた。彼の『折たく柴の記』に『井泉ことごとくつきて、水なければ火消すべきやうもあらず』とあるは、當時の震災に伴ふ火災のさまをいつたのであるが、二百年前の新井白石をして『水なければ火消すべきやうもあらず』と嘆かしめた、同じ憂き目を我等は今度の大震災に見なければならなかつたのである。それらの點からいつても、我等の所謂文化の價値が何處にあるのだらうか。

以上記した、それらの地震より以上に甚だしかつたのは、寶永四年十月四日に起つた大地震である。その日の地震は、東は關東から西は九州に至る海底の大地震であつて、爲めに大平洋に面した九州、中國、近畿、關東の國々は、大海嘯の大洗禮を受けたのだつた。そして同じ年の十一月二十三日には、富士山の鳴動と共に、大爆發となり、所謂富士山の瘤、寶永山なるものが生れ出たのであつた。

更に、寛政四年には、九州地方に大地震に伴ふ大海嘯があつて、九州一圓はひどく荒されたのだつた。

越えて天保年間には、京都附近に、佐渡に、陸前に、釧路に、更に釧路、根室、渡島の三國に亘る都合五回の大地震があつて、佐渡、釧路の地震の時には、大海嘯が伴ふたのだつた。

弘化四年三月二十四日には、信濃、越後の二國に大地震があつて、松代、須坂、

飯山、高田の諸城は一氣に搖り倒され、岩倉山は崩壞し、爲めに信濃川を埋め、堤は忽ちに決潰して、多くの村落を押し流し、一方善光寺の御堂、山門は僅かに倒壞を免れたが、大勸進、大本願寺等はすべて、或は潰れ或は燒け、當時の善光寺町三千六十九軒の人家は文字通り全部燒失し、町民等六萬人中實に三萬の死者を出したのだつた。其他の箇所に於ける死者二千七百二十六人、傷者八百九十人、人家の半潰二千百九十軒、倒壞流失の人家、五千三百七十七軒であつた。

右の弘化四年から九年を經た嘉永六年二月二日には、相模、駿河、遠江、伊豆、三河の五ヶ國に亘つて大地震があり、壓死者數千人を出した。翌安政元年六月十五日には、山城、大和、河內、和泉、攝津、近江、丹波、紀伊、尾張、伊賀、伊勢、越前の諸國に亘つて大地震があつた。中でも伊賀、伊勢、大和の三ヶ國は被害甚だしく、伊賀上野のみの倒壞家屋三千、死者五百を出したのだつた。

同じ年の十一月四日には、畿內、東海、東山の諸國に亘る大地震があり。その翌五日には、南海、西海、山陰、山陽の四道に大地震があり、此の二日間に亘る大地震の爲めに、諸國に海嘯暴溢し、死者傷者幾萬人なるを知らずと傳へられてゐる。

その翌る年、即ち、安政二年十月二日に、江戸の地を襲ふた大地震が、最もよく世人に記憶されてゐる所謂『安政の大地震』なのである。安政見聞誌に曰く、

安政二卯年十月二日夜四ッ時(今の十時)大地震ゆり出し、土藏傾き、家潰るゝ事夥しく、老若男女の死亡數知らず、此時八方より猛火炎々と燃えあがりて天を焦し出火、初め、三十八口なりしが、近きは燒けつゞきて五十二口となり、又二十七口となる。追々燒けひろがりて翌日午の刻(今の正午)全く鎭火す、猶ほこれがために、人命を絕つ事夥し。御府內中の人民、一瞬のうちに命を失ふもの數萬人、實に前代未聞の怪談なり。其後のゆり返しある故、又もや大地震あらんかと、人々は恐れ、大道へ荷物等を積んで圍ひをなし、こゝに寢ること七八日頃に至り、地震漸く薄らぎ、おひ〳〵野陣するもの少く、且つ十四日雨降るにより野宿をやめ

たり云々』

と、記されてゐる此時の倒壞燒失家屋は二萬五千軒で、死者も一萬五千人であつた。

ついで安政以後に人心を驚かしたのは、明治二十四年の濃尾の大地震で、死者七千二百人、傷者二萬人、倒壞燒失家屋十四萬戸であつた。

以上が即ち歴史に殘されてゐる我が國の重なる地震なのである。

十二

安政年間の江戸の大地震にも、流言蜚語が盛んに行はれたやうである。暴利を取締る御布令も出たやうである。罹災民を救助すべき御救小屋も數多く急造されたやうである。

が、流言蜚語を取締る御布令は出なかつたやうである。且つ、幕府が兵を出して

ものものしい警戒をしたなどいふ事は、見も聞きもしない。それでゐて江戸の復舊は、二年を出ないうちに完成されたといふ事である。勿論、當時の江戸の戸數は約十五萬戸であつて、罹災家屋は其の二割ほどにしか當つてゐない。從つて、復舊も容易であつたのかも知れないが、今と比較して、文化の程度に甚だしい相違があり

するにも拘らず、秩序整然、直ちに復舊を完成したのだ。

復興院といつたやうな、もの〳〵しい特別機關の設けられてゐなかつたのはいふまでもない事で、流言蜚語も單に、迷信といふ程度のものに過ぎなかつたのであらう。

昔の人に對して、むしろ恥づべきは現今の所謂文化なるものである。なるほどお金は、我等の生存上になくてはならぬものだ。文化も勿論必要である。が、いましむべきは、それらのものに中毒せざらんことであるにも拘らず、しかも既に、黄金に中毒し、文化に中毒して、病膏肓に入るものゝ數は、幾千萬幾百萬といふ多數に

のぼつてゐるのだ。

別けても恐るべきは、文化中毒の重症者であつて、彼等の爲めに、國家は常に、すくなからず迷惑を感じてゐるのである。

今度の震災に、政府が何んの躊躇するところもなく最も敏速に、戒嚴の令を震災の地に布き、暴利取締の令を發布したのも、これを小にしては、彼等黄金中毒、文化中毒の兩者を警めんが爲めなのだ。

しかも戒嚴の爲めに費された兵員の勞力は、けだし我等の想像も及ばざる程度のものであるのはいふまでもないことで、兵數も亦實に多いのだつた。

東京、神奈川、千葉、埼玉の一府三縣に亘る戒嚴地帶に集中された當時の兵力は歩兵二十一個聯隊、騎兵六個聯隊、砲兵七個聯隊、工兵十八大隊、其他各種の技術部、衛生隊の全部を合せて都合五個師團乃至六個師團といふ、恰度大正十年度に於ける、關東平野の特別大演習に參加した兵力と同じである。

しかしてそれらの兵員は、日本全國の各地から早きは一日のうちに、遲くも十日を出ないうちに、それ〴〵戒嚴の地に集まつて、西は三島、御殿場から、寒野、厚木附近の相模平地の全部を、北は埼玉の北部まで、東は銚子、田原附近まで、南は房州館山に及ぶ擴大な警備地域の中で、重大な警備の任に當りつゝ、或は罹災者の救護に、或は交通通信機關の恢復に、孜々と努めた、甚大な兵員の勞力に對し、且つは政府の執つた、機宜の緊急處置に對し、我等は、多大の欣幸を感じ、感謝の意をさゝげざるを得ないのである。

と同時に、斯かる非常の際に、特に明瞭に見せつけらるゝ彼等中毒者の醜き態度——或る意味からいふ文化の餘弊を、極度に悲しまざるを得ないのである。

勿論、彼等中毒者が如何に事を企もうとも、我等には國家といふ大きな味方があるのだ。彼等に毒さるゝ憂ひは絶對にありはしないが、らちもなき流言に脅されて狼狽の限りを盡した我等の輕率、無信念も亦、國家に對して大いに罪ありといはな

ければならぬのだ。否、我等の祖先に對して、大いに愧ぢねばならぬのである。

尤も、今度の災害は、一年餘に亘る彼の日露戰爭を、一夜のうちにしつくしたより以上に甚だしい損害を被つたほどの一大災害なのである。

從つて、慘狀の如何に甚だしかつたか、混亂の如何に甚だしかつたかは、これをまのあたりに見ないものゝ、到底想像し得べくもない程度のものであつたのはいふまでもない事で、あの際、よしんば流言蜚語が行はれなかつたにしても、ひどしく燒け出された少數の警察官などの力で、何んとして秩序がたもち得られ、救援が出來得やうぞ。軍隊の出動はむしろ當然であつたのだ。

當局者が逸早く、戒嚴の令を震災の地全部に布いたのも、一つは、破壞されたすべての機關の恢復に備へんが爲めなのであつたのだ。

斯くして、災害の地に召集された十萬餘の兵員は、すべて戰場をそのまゝに、否戰場より以上の慘苦を嘗めつゝ、驚嘆に値する効果を着々と擧げ得たのだつた。

前代未聞の慘狀裡に於けるすべての機關が意外に早く、ともかくも恢復の運びに至つたのは、ひとへに彼等兵員の力によるものである。しかも彼等兵員の中には——たとへば第一師團の各部隊員の如きは、その全部が災害地の出身者であつて、或は父母妻子兄弟を喪ひ、或は家を燒かれしたものも、決して尠くはないのだつたが公事は飽までも公事として、絶對に私事をかへりみず、最も勇敢に、專心一意、罹災者の爲めに盡したのだつた。

のみならず、多くの人を助けて、己れ自身は逃ぐるに暇なく、燒け落つる棟木の下に命を失ふた、勇敢無比の兵員さへもあつたのである。斯くの如き悲壯言語に絶する、忠勇心の所有者たる彼等兵員の大努力によつて、まさに動搖せんとせし人心は忽ちに平安に歸し、軍隊なる哉の讃辭を人々の口から叫ばしめたのだつたが、由來我が國は、他の諸外國に比較して、災害の度數の非常に多い國なのである。

地震に、暴風に、共に世界の第一流に數へられてゐる所謂、世界屈指の地震國で

あり、暴風國であるのだ。

世界の三大地震國中、日本は其の第一位で、第二位は伊太利、第三位は北米西海岸といふ順位にあり、又、世界の三大暴風國中、其の第一に位するものは、印度洋から濠州を襲ふサイクロン風であつて、即ち濠州を第一位に數へ、次は、墨西哥灣より北米フロリダ州を襲ふハリケーン風で、即ち北米が第二に位し、次は、比律賓より日本を襲ふタイフーン風で、即ち日本は其の第三位にあるのだ。

それらの災害に加ふるに人爲的の禍――たとへば大火の如き――は、朝に夕に、我等の身に迫りつゝあるのだ。されば我等は、今後に於ける大地震、大暴風等に備ふる充分の覺悟と　出來得べくばそれらの災害から免れ得る、何等かの準備がなくてはならぬのだ。が、人智の限りを盡し、資力の限りを盡して、或は耐震に、或は耐火、耐風に、如何なる事を成さうとも、劫火は如何ともしがたく、大自然がもたらす天變地異の大偉力には、到底耐へ得べくもないのである。

生命を脅威するほどの一大事變に際し、文化が何にならう、富が何にならう。比較的力となり得るものは、生死を超越した堅き信念！、ただそれのみである。常に文化にのみ心を奪はれて、精神の空虛を敢て補はうとしなかつた矛盾は、やがて事變に際會して狼狽となり、輕擧盲動となるのである。

今度の震災には遺憾なく、それらの事がうらがきされたのだつた。試みに、當時の新聞に記載された『震災餘聞』ともいふべき記事の中から、以上述べた說についての今後の我等の心得ともなるべき、いくつかの話を拾ひ集めて、記して見るとし

◆

これまでの地震には、學者の地震に關する研究や調査が、かなり頻繁に發表されて、學界はもちろん、一般社會を隨分賑したものであるが、今度の大震災には一向學者の、まとまつた說が今に發表されないのは、いつたいどうしたのだらう。ま

さか地震學者の全部が死んで了つたといふのでもなからうに、やはり狼狽して了つて、研究どころの騒ぎぢやなかつたんだらう。

◆

安田銀行頭取安田善五郎氏は、その邸宅が恰度本所の被服廠裏手、横網町に在り被服廠を嘗めて三萬二千餘人の人を燒き殺した恐るべき火は、遂に安田邸をも襲ひ黑烟すさまじく四邊を立ち罩めた爲め、其の日在邸中の善五郎氏は、到底助るに道なしと覺悟を定め、令孃を絞め殺して自分も自殺をしやうと令孃の頭に手をかけた處、令孃が『まだあそこへ逃げられるじやないの?』と、一つの空所を指した。負ふた子の敎へに邸宅の隅へ避難し、それから船によつて隅田川を渡り、對岸の淺草藏前へ逃げ、危く一命を助かつた。

◆

横濱外人街の全滅によつて、日本在留外人で死んだものは非常にたくさんある。これは横濱フエーリス女學校長米國人ミス、カイバー女史の話である。

カ女史は、地震と共に倒壞した校舍の下敷となつてしまつたが、幸に首だはけ出てゐた。しかし彼女は悲鳴をあげたり、助けを求めたりなんかは決してしなかつた職員や生徒はそれと氣がついて、直ちに懸命になつて助け出さうとしたが、材木と煉瓦がうづ高く崩れ懸つてゐるのだ。しかも附近の家からは早くも火を發したのである。火の近づかぬうちに女史を助け出さうとするには、すくなくとも百人以上の力をもつてしなければならぬのだが、女史を助け出さうとしてゐる人たちの數は、僅かに十人足らずである。女史は平然として、

『到底駄目です、早く逃げて下さい。私は此のまま天國へ行つて、皆樣の幸をお祈りしてゐます、左樣なら』

と、ほゝゐんでゐるのである。が、職員や生徒たちは、それでも一生懸命に煉瓦を一つ一つ取りのけてゐるのだ。火はいよ〳〵近ついて來た。女史は聊か氣色ばんで

『神樣の御命令で私は天國へ行くのです。ちつとも助かりたくありません。早く逃げて下さい。早く、早くッ、左樣なら、他の皆樣にも、よろしく言つて下さいよ』

職員や生徒たちが手をやすめて、默禱をしてゐるうちに、火がついて來た。女史はそのまゝ焔の中に消えて了つた。

◆

淺草山谷町ではこんな事があつた。家の下敷になつた煙草屋のおかみさんが兩手だけを出して、

『誰か助けて下さい』

と、一生懸命に叫んでゐる、折柄通りかかつた近所の大工の小僧が、助け出さうと思つて手を引つぱつて見たがビクともしない。そのうちに火は廻つて來た。小僧はもうこれまでと逃げやうとしたが、おかみさんは死力を盡していつかな小僧の手を離さうともしない。『おかみさん、もう駄目だよ、どうか放して下さい』と、小僧も今は一生懸命である。力を限りにおかみさんの手を放さうとする。斯くしてしばらく必死と爭つてゐたが、とうどうおかみさんが負け、小僧の手を放した。小僧は脫兎のやうに其處を逃げ出したが、しばらく走つてあとをふりかへり見た時には、もうその煙草屋の前には黑煙がうづをまいてゐた。

◆

横濱市元町小學校の某女教師は、地震と共に崩れ落ちる校舍から身をもつて逃れた。そしてすぐ石川仲町の自宅にかけつけた、かけつけて見るともう我が家は燒け

てゐた。二人の愛兒はどうなつたろ、きつと燒死してしまつたに相違ないと思つた女教師は呆然と自失してしまつた。しかし彼女の二人の愛兒は婆やの手で救ひ出されてゐる事が判つた。程經て婆やにつれられて來た、ピン〳〵した我が子の姿を見ると、彼女は大手をひろげて二人の愛兒をひしと抱いたがその次の瞬間にはゲラゲラと笑ひ出した、そして傍に落ちてゐた瓦の破片を取るや、愛兒の顏をめつた打ちに打つた、そして間もなく彼女はくびれて死んでしまつた。絶望のドン底から喜びの絶頂に飛び上つた時、彼女はあまりの嬉しさに發狂したのである。

◆

何分風向きが何度も變るので火のまはり方の早いことつたらありませんでした、私は數萬の避難者と丶もに、猛火に追はれて永代橋際まで來ました、こゝなら大丈夫と思つてゐると、川向ふの京橋、日本橋は全區猛火につゝまれ、そちらからも避

難者がなだれを打つて橋へ橋へと押しかけて來ました。火は橋の兩側から攻めたて丶來ます、火に近いものはバタ〳〵と倒れました私は橋の中央から少し橋によつた方にゐましたが、なにしろ熱くて熱くてたまらなかつたのです、そのうちにアレヨといふ間もなく橋桁へ火がついたのです、もうだめだと觀念した群集はドブンドブンと河中に飛びこみましたが女子供は河中へ飛びこむ事も出來ず、たゞ悲鳴をあげて狂ひまはるばかりでした、恰度九時頃でしたでせうか一大音響と共に橋は燒け落ちてしまひました、それと同時に橋上の避難者は雨のやうに河中へ降りました、私は幸ひにもくひにすがりついてゐて助かつたのでしたが、あの時の火ばかりは、どうしても劫火としか思はれませんでした。

◆

東京に於ける一流の大吳服店は、何れも地震にはともかくも無事だつたが、後に

みんな燒け失せて了つた。

それは一日の事である。三越も燒けた、白木屋も高嶋屋も燒けたといふ噂に、ビク〳〵ものであつた上野廣小路の松阪屋呉服店では、店員の全部を擧げて商品の取片づけに大騒ぎをしてゐる眞最中、本石町方面を燒き盡した猛火は、早くも南方十町の地點まで押し寄せて來た。その時が恰度午後四時で、あはれ此の大呉服店も、他と同じ猛火の洗禮を受けるのではなからうかと危ぶましめたが、風の具合で火は見る〳〵逆行しはじめて、他の方面をさして燃えて行つた。

店員一同は涙を流さんばかりにして喜んだ甲斐もなく、翌る二日、今度は淺草方面から押し寄せて來た猛火の爲めに、遂に全館を包まれ、その日の午後五時二十分から午後六時十分に至る僅かに五十分間に、鐵骨煉瓦のあの壯麗な、一大建物は大火柱を立てゝ、ものすさまじく崩壞して了つたのだつた。

しかも昨日以來百方手を盡して、商品のありつだけを詰め込んだ本館背後の、鐵

筋コンクリート建の事務室も、あはれ外廓をのみ殘して全部火が廻り、折角苦心した商品も、こゝでそのまゝ灰と化したのである。

◆

日本橋の或る大きな石油問屋では、近づく火の手に脅かされつゝも、川筋を幸ひ船へどん〳〵と荷物を移し、一家揃つてその船で逃げ出したが、餘りに高く荷を積み過ぎた爲めに、橋の中央に引つかかつて、進むことが出來ない。仕方なく、今度は陸路をといふ考へから、家の裏まで船を漕ぎ戻して來た時、川に沿ふて建てゝあつた石油倉庫に火がうつゝたのか、轟然たる響きと共に爆發して、一家の人たちは一人も殘らず、その場で慘死して了つた。

◆

長野驛では毎日數萬の避難民が雪崩を打つて吐き出される。それらの汽車を降りる人と、他の乘り込む人とで、列車の發着毎にもの凄い修羅場を演じてゐる。其の間に或る女の如きは、列車から降りる際狼狽てゝ、他人の子供を背負つて飛び出し救護所へ行つて初めて人の子と判つたが、今更如何とも出來ず、汽車の中に取殘された我が子の上を思ひ、人の子の母の嘆きを思つて、泣くにも泣かれず地團太をふんでゐた。

◆

その日は夫は不在であつた。妻君は二人の子供と一緒にお晝飯をたべてゐた。其の時あの地震に襲はれたのである。

妻君は、十一と八つになる二人の子供を逸早く門前に運れ出し、

『しばらく待つてゐなさいよ』

と言ひ置いて、自分は再び屋内に入つて貴重品の數々を手にするなり、一散に再び飛び出したが、子供の姿はもう四邊には見へなかつた。妻君は仕方なく本庄から廐橋に走り、上野までやつと逃げて來たが、今頃は可愛い子供はどうしてゐる事やらと、人の子供を見るにつけ、僅かな慾が今更に恨めしく、胸が張り裂けるやうですと云つて、氣も狂はし氣に聲を立てゝ泣いてゐた。

◆

品川、上野間乘合馬車と云ふやうなものが出來た。夫れも荷馬車に四本柱を立て一寸した日覆ひをしたほんの間に合せものだ。

馬車がゴト〳〵と歩いて行く樣は、田舍などでは如何にも平和らしくていいものだが、つい昨日頃まで物質文明を誇り顏であつた東京の都大路と、さうしたものゝ姿を見受くるのは、あまりに悲慘である。何んといふあはれ果敢ないなり下りぶり

であらうか。そぞろに涙を催ふさざるを得ない。

◆

大宮驛前の救護所で、一人の若い女がやけどの治療を受けてゐる。地震の時、彼女の夫は病氣で寢てゐたのである。しかも重態で連れ出し得べくもないのだつた。彼女は地震と同時に一旦は逃げ出したが、直ぐ引きかへして、病人に不安の念を與へしめないやうにと、自らの恐怖心を強いて押しかくしてゐた。

そのうちに火は遠慮なく附近から襲ふて來たのだつた。彼女は遂に夫を捨てゝ、火煙の中をやつと逃げ出したのである。が、夫にも申譯がなく、田舍へ行つても親に合せる顏がないといつて、泣いてゐた。

◆

彼は姓を安達といつて、日露戰役に功七級を賜はつた在鄕軍人である。その日彼は商用で淺草方面へ出かけてゐたが、地震と知るやそのまゝ本庄の自宅へ驅け足で戻つて來た。家は無慘に倒れてゐるのだつた。

彼には一人の父と、妻と女の子が一人あつた。が、倒れた家の中かには、救ひを求める父の聲や、妻の聲が微かに聞へてゐるではないか。彼は躍りあがらんばかりに喜んで、先づ父の聲をたよりに、往年の勇氣を奮ひ起して、間もなく父を無事に助け出したのだつた。

父といつてももう七十近い、しかも輕い中風に罹つてゐて、杖か人の肩に縋らなければ歩けない人なのである。彼はホッと一息して、父を地上におろし、更に妻子を助けようとしたが、もうその時は四邊一面が火の海となつて、妻子を救ひ出して居れば、折角助け出した父もろ共に燒け死んで了はねばならぬかも知れないやうな危い破目となつた。

『妻子よりも父の方で大切だ！』

彼は父を肩にして、脱兎のやうに火の中をくぐつて、ともかくも上野まで逃げて來た。

『なるほど妻子も大切ではありますが、あの場合、父を救ひもらして妻子のみ助け出したとしたら、心の苦しみは今より以上だと、せめてもの慰めにしてゐます』

彼は勇敢にさう語つた。

以上列記したやうな類ひの、悲話や慘話も拾ひ集めれば數限りもなくありはするが、その一つ〳〵に、我等の今後の心得とすべき、何等かの教訓の意がふくまれては居なからうか。

重ねて言ふ。生命を脅威するほどの一大災害に襲れはた場合の我等の唯一の寶は宗教的に言ふ何等かの堅き信念！。たゞそれのみである。次いでは國家的にいふ自

重心！、人道的にいふ犧牲心！などで、平素といへども、富を得んことにのみ心を傾け、文化を誇りとすることのみが、我等の全部ではないのだ。

十三

危險を避くるにいゝ場所だと思へばこそ、我も〳〵とあの被服廠跡へ逃げ集まつて來たのである。

が、我等の生命は佛者の所謂無常であると同時に、死の緣も亦無常なのである。斯くして一旦難を避けた三萬幾千人といふおびただしい集群は、遂に逃ぐるに途なく、一つ所で燒け死んで了つたのだつた。

三萬二千餘人！　それは立派な一市街のすべての人口ほどである。斯かる大多數の群集が、僅かに五町ほどの面積内で、折り重つて横死したのだ。三萬幾千人と一口にいつて了へばそれまでの事であるが、それほどの一大群集を見るといふ事は、

我等の一生を通じても、さうたび〳〵あり得るものではないのだ。

勿論、人の死を悼むといふ點からいへば、集團的であると否とに拘らず、ひとしく哀悼の意をささげなければならないのはいふまでもないことであるが、大多數の集りであつただけに、一しほの深刻さをもつて、我等は子孫につたへて、其所に横死を遂げた人々の靈を、長く弔はなければならないのである。

それかあらぬか近き將來に、それらの人の納骨を兼ねた一大記念塔を、被服廠跡に建設し、彼の回向院の如き寺院をも創設して、長く死者の冥福を祈るべき議が、東京市長をはじめ震災善後會の人たちによつて、既に決定したやうである。

その昔――それは明暦三年正月十八日の事であつた。今回の大震災と共に恐らく世界的ともいふべき大火災が江戸の町にあつた。

その日はあけ方から烈風が頻りに吹いて、砂塵を捲き上げ、樹木を搖がし、人々は寒い夢からさめて、悒々としてゐる折柄、突如、本郷丸山の本妙寺から出火し、猛火は見る見る擴がつた。前年の冬以來の旱天つゞきで、家々の屋根はから〳〵に乾き、井戸の水も涸れてゐた上に、未曾有の烈風だつたので、飛融の手は四方八方に伸びて、殆ど止まるところを知らぬといつた有樣であつた。

火は先づ下谷方面に伸び、更に神田の社前から駿河臺に飛び、一方下町の方は、須田町、石町、本町、伊勢町、小船町のあたりから川を越えて茅場町八丁堀に伸び東は佐久間町から柳原一帶をなめ盡し、更に濱町、新堀、靈岸島を越えて遠く鐵砲洲に及び、大川に碇を下してゐた百餘艘の船は、飛火に燒かれ、その餘勢は石川島佃島から深川方面へと伸びた。

翌る十九日も烈風猶ほ熄まず、燼灰を飛ばして物凄い光景を呈してゐたが、やがてまた小石川傳通院前鷹匠町と麹町方面とに同時に火を發し、前日に危ふく難を免れた町々を、飽くこともなく燒きはじめたのだつた。

先づ小石川方面の火は、牛込門、田安門、本城、二の丸、三の丸、天主臺等を燒

いてます〳〵勢ひを増し、一大紅蓮の焔となつて、更に神田橋、常盤橋、呉服橋、八代池河岸、大名小路、數寄屋橋等の門、橋、番所を一なめにしたのだつた。一方麹町七丁目から出た火は、半藏門、虎の門、芝愛宕下、増上寺等を燒き拂ひ、札の辻から遠く海岸にまで伸びたのである。

此の二日間に於ける燒失町數四百、二里八町の全面積は焦土と化し、萬石以上の大名屋敷五百餘、旗本百石以上の屋敷百六十、其の他小姓、書院番、大番組、小十人組等合せて七百七十三屋敷、神社佛閣三百餘、橋梁六十、倉庫九千餘を灰とし、一家悉死のもの八百五十七、燒死者の總數實に十萬七千人といふ、おびたゞしい數に上つた。

よつて本庄の地二丁四方を埋葬の場所と定め、それらの死者の靈を長く吊ふべく其所に一寺を建立し、無緣山回向院と名づけたのが今に殘るあの回向院なのである

歴史はくりかへすのたとへにもれず、今又はからずも、明暦のそれにも増した大慘事が同じ東京の地にくりかへされたのである。しかして同じ意味の――大正の回向院ともいふべき――企てが近く實現しやうとするのである。我等は双手を擧げて、その企てを喜ぶのである。

右の被服廠跡に於ける一大慘事をはじめ、我が關東地方に於ける今回の災害は、これを世界的にいつても恐らく前代未聞であるほどの大災害なのである。

從つて、文明と名のつくすべての機關が一時停止したのはいふまでもないことで普通電報の取扱はれるやうになつたのは、十二日目であつた。東海道線の汽車は二十日目に漸く半身不隨的に開通し、地方から震災地への郵便物は、二十二日目に、小包は越えて十月五日から受付を開始するといつた有樣で、此の間最も活躍したのは、飛行機であつた。勿論無線電信も幾分かは間に合つた。次いでは傳書鳩の活用で、その一例を擧げて見よう。

震災當日千葉縣四街道の野砲兵射擊學校では、その日の午後六時に、深川本庄方

面が大火であるといふ事を知つた外は、更に事情が判らなかつたので、同學校では一將校斥候に傳書鳩廿八羽を携へさせ、自動車で急遽上京せしめたのだつた。將校は猛火を冒して總監部に到着し、震天動地の慘害狀況を詳細に書きしたゝめ、翌二日の朝五時に、右の報告書を二羽の鳩に託して放つたのだつた。

鳩は黑煙天を焦す災害地域をまつしぐらに飛翔して、同六時二十分に無事歸着した。が。此の非常通信に接して同學校では、直に急を千葉縣廳に報じ、同時に五百名の決死隊を急派することに定め、一方縣下の物資を見る〳〵蒐集して數十の砲車に滿載し、一氣に東京へと驅けつけしめたのだが、斯かる敏速な行動をなし得たのは、全く傳書鳩の賜なのである。

其他にも傳書鳩が偉大な功をあらはした例は、隨分澤山あるだつた。

中にも飛行機の活躍は、實に悲壯なるものであつた。飛行しつゝ兩陛下の御安否を伺ひ奉つた小池中尉の如き、或は遠く大阪に使命を果した波多野中尉の如きがそれで、波多野中尉は陸軍大臣の重要な命令書を大阪の第四師團長にもたらすべく、氣流と天候の如何をかへりみず、二日午前八時東京を出發し、間もなく大阪に無事着陸して、重要な使命を美事に果したのだつた。

斯くして大阪から、世界各國に向つて震災の情況が傳達されたのであるが、人の同情は國の內外を問はず、實に多大なものであつた。

罹災者を救へ！

災害地の人ちたを極力救助せよ！。

日本の大震災に見舞の金品を出せ！。

さうした聲は內地のすみ〳〵に至るまで、外國のはし〳〵にまで及んで、同情の金品はみち來る潮のやうに、見る〳〵集まりはじめたのだつた。

震災以後の九月中に於ける臨時救護局に集まつた內外人の、同情の結晶たる義捐金品のうち、金高のみに於て四千〇七十三萬七千餘圓といふ巨額に上つてゐるので

ある。そのうちの三千五百〇九萬餘圓が、內地をはじめ殖民地及び在外日本人の義捐金高で、殘る五百四十六萬六千七百餘圓が、外國からの義捐金高である。

品物にしてもそれを金高にして、およそ三千餘萬圓といふ、おびただしい集まり方なのである。

しかも以上は單に、九月中に集まつた臨時救護局のみに於ける統計であるが、尙ほ現に月を越えて集まりつゝあるもの、今後に集るもの、及び宗教團體、その他の團體によつて各自に募集されたる金品――それらは團體そのもの、事業として、着々と救援の實を擧げつゝあるのだが――等を合すれば、恐らく一億以上の巨額にも上るであらうが、義捐金品の集り高に於いても、全く前代未聞といはなければならぬ。

『一分早ければ一人餘計に助かる！』。

紐育などではそれを標語として、日本に於ける震災寄附金の募集に一刻を爭ふたのだつた。倫敦などでは市長が發起人となつて、直ちに義捐金募集に着手した。佛國政府は、全國の各官公衙に對し、九月七日を期して一齊に半旗を掲ぐべく命令を發し、且つ劇場、活動寫眞館等の興行物全部に一日の休業を命じ、災害に襲はれたる日本に對し、おの〳〵吊意を表するやう、注意を與へたのだつた。支那は慰問使を特派して多大の同情を寄すると同時に、排日を嚴に取締り、防穀令を撤去したのだつた。其他の各國といへども、何れも涙ぐましいばかりの同情を日本に向つてそゝいだのである。

中にも米國は、義捐金に於てもその第一位を占めてゐるばかりではなく、驚くべき大仕掛の、大天幕病院までを寄附したのだつた。

天幕病院といつても、一時に二千餘名の患者を收容し得るほどの立派な野戰病院で、ベットの數だけでも四千五百臺あつて、手術室、研究室の設備は勿論、エツキス光線室、病院用普通自動車二臺、撒水自動車二臺、其他醫療器具、藥品に至るま

で設備萬端遺憾なく整ひ、加ふるに二百五十人の食事を一時に作り得るすべての器具附といふ、大袈裟なものであつて、しかも、百五十五名の醫師と看護婦が、三ケ月を支へ得る多量の食糧を自ら持參し、經營法其他を日本人に敎へ込んだ上、すべてを日本に渡すといふ、至れり盡せりの病院である。

以上は十六病院より成る一大野戰病院なのであるが。更に近く、組立式半永久的病院六棟をも寄附すべく、我が赤十字社宛に通知して來たといふ事である。

外人ですらさうした同情を寄せたのだ。內地の人たちが一齊に起つて、罹災者の救援に負けず劣らずの美擧を敢てしたのはいふまでもないことである。

が、それでゐて決して、至れり盡せりの救援とはいへないのである。罹災者は依然として哀れな罹災者で、彼等は、

『なあに、身一つで助かつても、死んだ人たちの事を思へば百萬長者だ。』

と、自ら勇氣づけては居るものゝ、季節は日一日と寒さに向ふ折柄だ、彼等は貧ふものの心配に併せて、

『これからの寒さをどうして過さうか?』。と、案じつゝあるのである。

しかし、たとへ裸一貫であるにしても、一家打ち揃ふてともかくも無事であつた人たちは、まだしもの幸である。親を喪ひ子を失ひ、夫に死に別れ妻に逝かれ、加ふるに家財のすべてを燒かれ盡した人たちの、そゞろに秋寒い今日此頃のもの思ひは、果してどんなであらうか。

『むしろ彼の時に、一思ひに燒け死んで了つた方がましだつたかも知れない。』

さう思ふのも無理のない事である。

が、哀れはひとり人間にのみ限つては居ないのだ。動物に絡まる、哀れなおとぎばなしをでも聞くやうな實話もあるのだ。

大地一度び搖れて、地上の到る處に滅亡の悲劇を生んだ中に、淺草の賑ひの一部分を引受けてゐた花屋敷の動物の身にも、慘ましい悲劇はあつた。彼等は平和なり日の東京市民にとつては、極めて仲のいゝお友達であつたのだ。虎が子を生んだといつては、人々は兄弟が出來たやうに騒いだ。お猿が怪我をしたといつては、子供はわざ〳〵お見舞に行つたりした。何んといふ平和な光景であつたらう。

それが今度の震災に次ぐ大火で、もう花屋敷も駄目だとなつた頃には、人々の中には早くも壓死を遂げ、燒け死にして、無事な人たちといへども、猶ほ生死の境に立つて右往左往と逃げまわつてゐるのだつた。

可愛想でも射ち殺さなくては危險だ！。

彼等動物が、平素如何に人に馴れてゐるとはいへ、猛火を見、滅亡の騒ぎをまのあたりに見ては、彼等の持つ野獸性のあらはれるのは當然で、しかも火は既に、花屋敷へと四方から迫つて來てゐるのだ。射殺するにしのびないなどと、躊躇してゐる場合でもないので、大瀧といふ當年七十五歳になるお爺さんは、斷然意を決して鐵砲を手にした。

この老人は、こゝのライオン以下のあらゆる動物の持ち主で、非常の場合に際して、この多くの猛獸を射ち殺す急所を知つてゐる第一人者なのである。

老人は無理に酒を呑んで、柵の中へはいつて來た。多くの猛獸たちは、もう近づいてゐる焰の熱に攻められて、赤い舌を出してあえいでゐた。あえぎつゝも老人の姿を見ると、嬉しさうに近よつて來た。

『殺しに來た者に、助けて呉れつたつて駄目だよ。』

と、老人は目に涙をためつゝも、先づライオンを一發で美事に射ち倒した。それから順々に、虎の夫婦も、五匹の子虎も、親象も、二匹の熊も、みんな射たれて了つた。勿論老人は、その間に幾度、涙を片手で拭き〳〵したか知れないのだつた。

『熊は三頭だつたが』

と、老人は四邊を見まわした。すると一匹の熊が、向ふの小池の中で首だけを出して老人を見てゐた。老人はその熊にも筒先きを向けた。熊はイヤ〳〵をするやうに、首を振つてそのまま水の中へもぐつた。やがて又首を出したので先きと同じやうに筒先きを向けた。熊は又水の中へ首をひつこめた。

最後に熊が首を出した時、老人は此度こそはとねらひを定めた。その瞬間、熊がニコニコと笑つたやうに思はれた。老人は射つのをやめた。

『それぢやおとなしく水の中に居ろよ。決して飛び出すぢやないぞ。』

老人は熊にそう言ひ殘して、もう火のついてゐる花屋敷を素早く逃げ出した。

翌る日。すつかり燒け果てゝ了つた花屋敷の跡へ出かけた老人は、あの熊の居た鐵柵の前に行んだ。熊は平氣で生きてゐて、大瀧老人の姿を見ると、いきなり池の中から飛び出して、燒けたゞれた鐵柵をへだてゝ、さも嬉しさうに頻りに首をふるではないか。

「昨日はおまへも一緒に殺さうとしたが、許して呉れよ。しかしよう生きてゐて呉れた。」

老人は涙をボロ〳〵と滾しながら、柵の中へはいつて、熊を抱いた。その熊は、今も尙ほあの燒け跡の金網の中で、何事も知らぬ顏に、元氣よく生きてゐるのである。

◆

とにかく今度の災害はひとり、これにまのあたり遭遇した人たちのみの不幸ではなかつたのである。

直接間接に損害を被つた點からいへば、全國的であり世界的であつたのだ、商取引に、親族關係に、さては知己の遭難といつた風に、精神的に物質的に、多くの人に累を及ぼしたのだつた。

されば飛報のいたる毎に、人の一喜一憂はよその見る目も慘ましいほどで、しかも何んの關係もない人たちまでが、あまりに甚だしい災害の報に、最初の好奇心もやがては涙ぐましい同情となつて、よそ事だなどいふ考へをもつてゐる人は、恐らく一人もないのだつた。

が、斯かる場合にも人々は先づ第一に、田母澤の御用邸に御避暑中の、兩陛下の御安否をお案じしたのだつた。

それは災害の第一報に接した時の事であるが、

『兩陛下共に、御無事で在らせらるゝだらうか？』

國民のたれもがみんな、さう氣遣ひ參らせたのである。が、別けても宮内省の人たちに、さうした事にぬかりのあらう筈はないのだつた。

言ふまでもなく、東京を中心にした通信及び交通の機關は、激震と同時に何んの用もなさなくなつたのである。從つて、日光の田母澤に在らせらるゝ、兩陛下の御安否の程も伺ひ難く、且は帝都震災の狀況を、上聞に達すべき必要もあるので、宮内大臣は陸軍大臣に旨を傳へ、飛行機による御安否奉伺を依頼したのだつた。

陸軍大臣は時をうつさず、陸軍飛行隊第五大隊に命を下し、復命を待つ事にした

此の榮えある飛行の命を蒙つたのが、立川の飛行將校、小池武夫中尉なのであつた

同中尉は直ちに飛行機を操縱して、關東平野を一氣に北へ航走し、途中機上から、沿線の被害狀況をも併せて視察しつゝやがて、田母澤御用邸の上空まで來た。

中尉はかねて用意の、

『天皇、皇后兩陛下の御安否如何、幸に御安泰に在しまさば、旗を振つて合圖されたし。賢所並に攝政宮殿下御無事。』

と書きしたゝめた報告筒三個を投下し、靜かに幾回となく、御用邸の上空を旋回しつゝ、答信を待つてゐた。

すると間もなく待從らしい人が出て、大旗を頻りに振り上げ〳〵合圖するのだつ

た。中尉はそれを機上から認め、安堵の胸を撫で下して、再び幕地に、間もなく東京へ歸航し、無事に復命したのだつた。中尉の此の復命は、やがて宮内大臣によつて、攝政宮殿下に言上されたやうである。我等一般國民も亦、間もなく新聞によつて兩陛下の御無事を知り參らせ、今更のやうに安堵したのだが、待從の人が大旗を振り上げ〳〵して、兩陛下の御安泰を飛行機に告げた當時の光景は、けだし悲壯を極めたものではなかつたらうか。

陛下の御安否を伺ふにさへ、いまだかつてためしのない、斯かる方法が撰ばれたほどなんだ。此の一事によつても、災害の程度の如何に甚だしかつたかが、まざまざと想像されるではないか。されば政府は其後も更に幾つかの勅令を發布して、すべてに缺くるなき處置を執り、併せて帝都の復興に、今や全力をそゝぎつゝあるのである。

目ざむるばかりの大東京を見るの日も、あまり遠くはなからう。横濱もやがてはもとの横濱より以上に立派な、大横濱となるであらう。否、さうならなくてはならぬのだ。何んとなれば、我等は祖先と共に、今日までに幾度となく自然の大暴虐に災されて來た。が、壞されても燒かれても、すべてを大にこそすれ、決してそのまゝにへたばつては了はなかつた。つまり我等は、順良にして最も忠實なる建設的努力の支持者だからである。

今度の地震には、海嘯も伴ふた、刼火も伴ふた。その三つの恐るべきものに災されて、幾十百萬の家は一氣に倒れ、幾十百萬の人命はしばしの間に害はれ、幾十百億の財寶は一朝にして空しく灰となつて了つた。恐るべきは自然の有つてゐる破壞力である。

しかし、我等の有つてゐる破壞から建設へ、空虛から充實へ、萎縮から發展へのねばり強い根氣と、頑として屈せぬ本能的な努力も亦、偉大なものと云はなければならぬ。假令それが、賽の河原に於ける幼兒の努力にも似た、あるに甲斐ない徒勞

な努力であるにしても、我等は壞滅の悲哀に長く沈まず、建てゝは壞され、燒かれてはまた建てして、しかも今日の大に及んだのである。

が、災害のあとに行みて今更に思ふ、自然の有つてゐる破壞力の如何に甚だしいかを。（一二、一〇、一五、稿）

地獄相に直面して　終

大正十二年十二月一日印刷
大正十二年十二月三日發行

定價金七拾錢

著者　川口怒濤

發行者　大阪市南區安堂寺橋通四丁目三九番地　井上尙一

印刷所　大阪南區難波稻荷町二丁目九百卅番地　一書堂印刷工場

印刷者　今西元治

著者檢印

發行所　大阪市南區安堂寺橋通四丁目卅九番地　振替大阪三四九四、電話船場一七五七　一書堂書店

526
35

終